

田原本町文化財 調査年報 18

2008年度



田原本町教育委員会

田原本町文化財 調査年報 18

2008年度



田原本町教育委員会

例　言

1. 本書は、田原本町教育委員会が2008年度（平成20年度）に実施した文化財事業の概要をまとめたものである。
2. 埋蔵文化財の発掘調査については、土地所有者・施工業者ならびに近隣の皆様にご協力とご理解を賜った。記して感謝します。
3. 本書の執筆は、I.1を奥谷知日朗、I.2を清水琢哉・豆谷和之・奥谷の調査担当者、II・IIIを河森一浩・藤田三郎、IVは上峯篤史（日本学術振興会特別研究員DC）・東島沙弥佳（京都大学大学院理学研究科　自然人類学研究室）が執筆し、西岡成晃の協力を得て藤田が編集した。

目 次

I. 川原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発と遺跡の異動	
(1) 町内における開発と発掘調査	1
(2) 遺跡の異動	2
2. 埋蔵文化財の調査	
(1) 発掘調査の概要	3
1. 唐古・鍵遺跡 第104次調査	5
2. 唐古・鍵遺跡 第105次調査	5
3. 唐古・鍵遺跡 第106次調査	6
4. 羽子田遺跡 第34次調査	6
5. 泰楽寺遺跡 第4次調査	7
Column 泰楽寺出土の中世瓦	8
6. 法貴寺斎宮前遺跡 第8次調査	9
7. 伊与戸遺跡 第2次調査	9
8. 阪手ホウズミ遺跡 第1次調査	10
9. 常楽寺推定地 第6次調査	10
10. 下ツ道 第3次調査	11
11. 宮森遺跡 第1次調査	11
(2) 試掘調査の概要	12
团栗川古墳 試掘調査	13

II. 資料の整理と活用・普及

1. 文化財資料の整理・保管	
(1) 埋蔵文化財の整理・保管	17
(2) 資料の撮影と写真・図面のデジタル化	19
(3) 資料の寄贈・購入と図書の受領	20
2. 遺跡・文化財の保護	
(1) 史跡の公有化	21
(2) 町指定文化財	22
平野権平（長泰）宛豊臣秀吉感状	23
3. 講座	25

4. 学校教育等への支援	
(1) 小学校出前授業・教材貸出.....	26
(2) 中学校職場体験学習.....	27
(3) 大学の学外授業.....	27
(4) 講師の派遣.....	28
5. 刊行物一覧.....	29
6. 資料の活用	
(1) 資料の貸出.....	30
(2) 写真掲載・撮影.....	32
(3) 資料調査.....	33
7. ボランティア組織	
(1) ボランティア組織の概要.....	35

III. 唐古・鍵考古学ミュージアム

1. 企画展・ミニ展示	
(1) 春季企画展「瓦に込めた願い～田原本の瓦づくりと民間信仰～」.....	39
(2) 秋季企画展「弥生デザイン～原始・古代の文様～」.....	42
(3) ミニ展示	
ア. 夏季ミニ展示.....	45
イ. 冬季ミニ展示.....	45
2. 入館者・ホームページ	
(1) 入館者数.....	46
(2) 入館者アンケート.....	48
(3) 視察・研修・学校等からの来館.....	48
(4) ホームページ.....	49
3. ボランティアガイド	
(1) ボランティアガイドの実績.....	49

IV. 資料の報告

1. 唐古・鍵遺跡における石器製作残滓の様相（上峯篤史）	53
2. 唐古・鍵遺跡北部地域の動物遺存体（東島沙弥佳）	65



I. 田原本町の埋蔵文化財

1. 町内における開発と遺跡の異動

(1) 町内における開発と発掘調査

本町における2008年度(平成20年度)の民間開発行為等による埋蔵文化財発掘届(第93条)は57件、地方公共団体等による通知(第94条)は11件で、計68件を数える。ここ数年、発掘届件数が微増傾向にある。

今年度の発掘調査は13件である。このうち田原本町教育委員会が実施した発掘調査は12件で、その内訳は個人住宅の建築6件、公共事業4件、民間開発2件である。

第1表 田原本町における2008年度の発掘届・発掘通知件数一覧

免掘届 (93条)	発掘通知 (94条)	通知内容	発掘調査		工事立会		慣習工事		先行工事	
			8	18	39	1				
		実施分	町12(調査1) 県1	20						
57 (変更届2)	11									

第2表 田原本町の発掘届・通知と発掘調査件数の推移

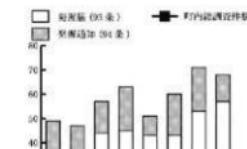
	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08
発掘届(93条)	29	25	44	45	43	43	53	57
発掘通知(94条)	20	11	13	18	8	17	18	11
計	49	36	57	63	51	60	71	68
調査件数	町	19	18	18	14	12	12	11
	県	1	1	3	0	4	4	2
町内調査件数	20	19	21	14	16	16	20	12

第3表 町教育委員会が実施した発掘調査の原因別推移

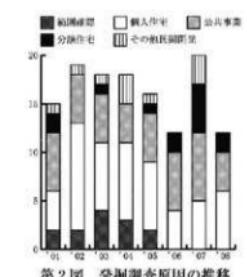
調査原因	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08
範囲確認	2	2	4	3	2	0	0	0
個人住宅	4	11	7	8	7	4	5	6
公共事業	6	5	5	4	5	6	7	4
民間開発	分譲住宅	2	0	1	0	1	2	5
	その他の	1	1	1	3	1	0	3
計	15	19	18	18	16	12	20	12

第4表 町教育委員会による発掘調査の面積と出土遺物数の推移

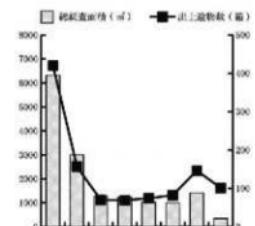
	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08
総調査面積(m ²)	6314	2988	1262	1235	1030	986	1400	341
1件あたりの調査面積(m ²)	420	157	70	69	74	82	70	31
出土遺物数(点)	354	783	532	314	104	95	146	103



第1図 発掘届・通知と調査件数の推移



第2図 発掘調査原因の推移



第3図 調査面積と出土遺物数の推移

(2) 遺跡の異動

平成19年度の発掘調査等の成果に基づき、20年度に遺跡の異動の報告をおこなった。

秦楽寺遺跡（秦楽寺城跡）（第4図） 昨年度、遺跡の北西端で実施した第3次調査では、古墳時代～中世の遺構を検出し、玉作関連遺物をはじめとする遺物が多量に出土した。この成果から、遺構分布が予想される遺跡北側の字「廿」「御茶池」と、遺跡東側の字「浄土院」について踏査をおこなったところ、古墳時代・中世の遺物を採集した。遺跡北側及び東側は土地区画の乱れも確認できる点からも、遺構が埋没している可能性が高いと判断し、遺跡の範囲を拡大した。

また、遺跡南側の字「南垣内」「東垣内」では第2次調査や工事立会を実施し、中世の遺構や中世遺物包含層を確認している。近世初頭の集落絵図も参考に、南側へ遺跡範囲の拡大をおこなった。

第5表 田原本町内における遺跡の異動一覧

遺跡名	異動内容	報告	報告日	通知
秦楽寺遺跡（秦楽寺城跡）	範囲拡大	田教文 第52号	H20.4.28	教文 第7004号

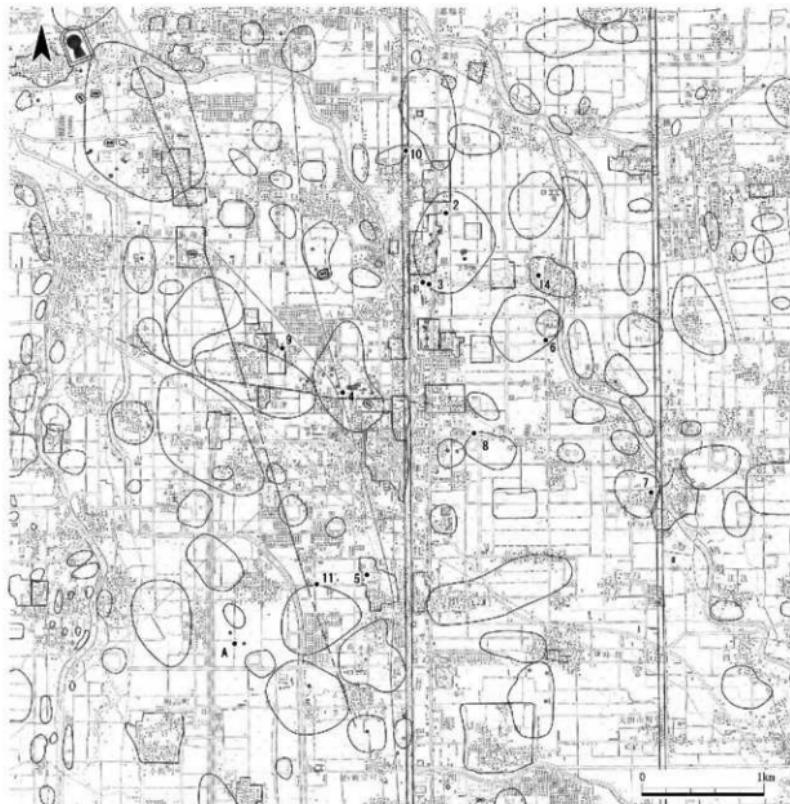


第4図 秦楽寺遺跡の異動 ($S = 1/4,000$)

2. 埋蔵文化財の調査

(1) 発掘調査の概要

弥生時代～古墳時代 羽子田遺跡では、近年宅地化による発掘調査が継続しておこなわれている。本年度の調査でも弥生時代後期から古墳時代前期を中心とする遺構を検出した。検出した遺構の多くは集落にともなうものとみられるが、遺構密度は希薄で、集落末端の様相を呈しているとみられる。昨年度の調査で古墳時代の玉製作がおこなわれていることが判明した秦楽寺遺跡では、本年度も継続して調査を実施した。本調査においても多量の玉作関連遺物が出土し、本地まで玉作集落が拡がることを確認した。



第5図 田原本町の遺跡と調査地点

古代～中世　秦楽寺遺跡の調査では、平安・鎌倉・室町期の各時期の遺構を検出したことで、寺院「秦楽寺」の成立及び変遷を考える一助を得た。また、多量に出土した被熟瓦は、戦国期に落城した「秦楽寺城」との関連が推測される。伊与戸遺跡の調査では、宝篋印塔の一部を礎石に転用した柱穴を検出した。この成果から、調査地付近に中世寺院の存在も想定される。法貴寺京宮前遺跡では瓦質井戸枠を用いた井戸を検出し、中世集落「舞ノ庄」が本地まで拡がることも考えられるようになつた。

第6表 2008年度 発掘調査一覧

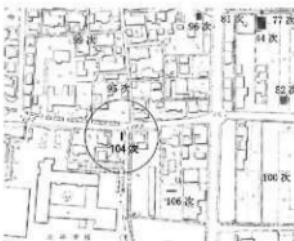
遺跡名	次数	調査地	原天者	原岡	期間	面積	想定	備考	
								出土遺物	遺物叢
1 奈古・龍道跡	第104次	田原本町人字御小字御出 71番15	(株)アースストラッフ 分譲住宅の 建築	2008.7.28	3m ²	古水環礁 貝殻加日磯	受託事業		
		古墳時代：河跡1条	なし						
2 奈古・龍道跡	第105次	田原本町大字御小字ソ子田 98番3他	田原本町	下水道工事	2008.10.29 -10.31	11m ²	瓦谷和之 発生土器、近世陶磁器、瓦、石 等	下水道課	
		弥生時代：土坑1基、溝1条、河跡2条							
3 唐方・羅道跡	第106次	田原本町大字御小字松本 120番8	個人	個人住宅の 建築	2008.10.29 -10.30	8m ²	清水	国庫補助事業	
		近世：志賀小瀬郡					発生土器、上層器、瓦質土器等	遺物箱1箱	
4 朝子田遺跡	第34次	田原本町大字新町小字池之内 74番1、75番3	細山尚事(株)	宅地分譲	2008.5.8 -3.19	87m ²	清水	受託事業	
		弥生時代：溝4条、柱穴5基 古墳時代：溝2条、河跡1条 中世～近世：素燒小溝井					発生土器、上層器、帆立貝、地 輪等	遺物箱3箱	
5 繁榮寺遺跡	第4次	田原本町人字御作小字田 22番1、226番8	田原本町	浴池の改修	2008.12.1 -09.127	170m ²	奥谷	建設課	
		古墳時代：土坑2基、溝2条、小溝5条、柱穴群、高ち込み 古代～近世：柱穴2基、落ち込み					上層器、板窓器、瓦器、中世陶 器、近世陶磁器、瓦、木製品、 石盤玉類未完成、ガラス1等	遺物箱83箱	
6 法貴寺京宮前 遺跡	第8次	田原本町人字法貴寺小字田 830番2他 東側道路	田原本町	下水道工事	2008.10.23 -10.24	15m ²	清水	下水道課	
		中食：舟11基、元：溝2条					土器器、瓦質土器、木製品等	遺物箱6箱	
7 伊与戸遺跡	第2次	田原本町人字伊与戸小字御屋内 173番1	個人	個人住宅の 建築	2008.11.11 -11.13	11m ²	清水	国庫補助事業	
		中食：大溝1条、落ち込み1 中世土器：土坑1基、溝2条、礎石建物跡 近世：大溝1条、小溝2条					土器器、瓦質土器、石製品等	遺物箱3箱	
8 阪手ホウズミ 遺跡	第1次	田原本町人字阪手小字下舟コ 456番18	個人	個人住宅の 建築	2008.8.4 -8.5	7m ²	瓦谷	国庫補助事業	
		中食：志賀小瀬					土器器、瓦器、近世陶磁器等	遺物箱1箱	
9 常楽寺御定塗 遺跡	第6次	田原本町人字古小字寺家 280番2	個人	個人住宅の 建築	2008.4.7 -4.9	7m ²	清水	国庫補助事業	
		中世～近世：志賀小溝4条 近世～近代：志賀小溝9条					土器器、瓦器、近世陶磁器等	遺物箱1箱	
10 ドク遺	第3次	田原本町人字御古小字人和井 442番1	個人	個人住宅の 建築	2008.4.8	3m ²	奥谷	国庫補助事業	
		近世：溝1条 近代：志賀小溝3条					土器器、瓦器、近世陶磁器等	小袋6袋	
11 宮森遺跡	第1次	田原本町人字新小字森ノ森 116番3	個人	個人住宅の 建築	2008.6.24 -6.25	10m ²	清水	国庫補助事業	
		近世：志賀小溝1条					上層器、瓦器、近世陶磁器等	遺物箱1箱	

1. 唐古・鍵遺跡 第104次調査

調査地の位置 今回の調査は、遺跡南端での宅地分譲に伴って実施した。建物の北西部に南北3m、幅1mの調査区を設定した。なお、本調査地の東側及び北側道路では、平成12年度に下水道工事に伴う工事立会を実施し、古墳時代の河跡等を確認している。

調査の成果 調査区全体が時期不明の河跡であった。深さ0.4m前後を測る。調査区が狭小であるため方向・規模は不明である。遺物は出土していない。

まとめ 調査の結果、調査地が河跡であることを確認した。遺物が出土していないため、詳細な時期は明らかでないが、隣接する周辺の道路で実施した平成12年度の下水道工事に伴う工事立会では古墳時代の河跡を検出しており、これと同一の遺構である可能性が高い。



1. 調査地の位置 (S=1/5,000)



2. 東壁堆積状況（西から）

2. 唐古・鍵遺跡 第105次調査

調査地の位置 今回の調査は、遺跡北西部での下水道工事に伴って実施した。昭和56年度に水路改修工事に伴っておこなわれた第12次調査により遺構が遺存しない可能性も考えられたが、史跡指定範囲内での工事であり、慎重を期して人坑部分3ヶ所を発掘調査に対応した。

調査の成果 各調査区で遺構が遺存することを確認した。東端の調査区（第1トレンチ）では、弥生時代中期中葉の河跡1条を検出した。中央の調査区（第2トレンチ）では、弥生時代中期中葉の河跡1条を検出した。西端の調査区（第3トレンチ）では、弥生時代の土坑？1基、溝1条を検出した。遺物はみられず、時期不明。

まとめ 今回の調査では、第1・第2トレンチで弥生時代中期中頃の河跡を検出した。唐古池北西端付近に谷地形が拡がり、弥生時代中期中頃の河跡が複数存在していたとみられる。なお、第3トレンチの溝は、周囲の調査成果から環濠となる可能性がある。



1. 調査地の位置 (S=1/5,000)



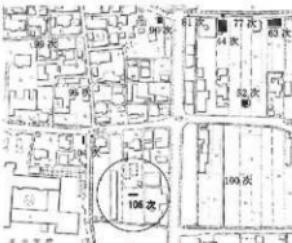
2. 第3トレンチ全景（北から）

3. 唐古・鍵遺跡 第106次調査

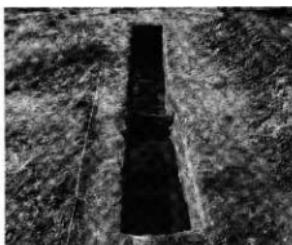
調査地の位置 今回の調査は、遺跡南端における個人住宅の建築に伴って実施した。建物予定部分の南半で東西8m、幅1mの調査区を設定した。

調査の成果 中・近世の素掘小溝群を検出した。また、調査区東端で粗砂堆積を確認した。周囲で確認されている河跡の一部である可能性がある。ただし、顯著な遺物を含まないため、時期については明らかにできなかった。

まとめ 調査の結果、遺跡南端部の状況を確認することができた。集落関連の遺構は存在せず、環濠の拡がりも確認できなかった。ただし、河跡を確認したことで遺跡周縁部の地形を復元するための貴重なデータを得ることができた。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)



2. 調査区全景 (東から)

4. 羽子田遺跡 第34次調査

調査地の位置 羽子田遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する、弥生時代～古墳時代の集落跡及び古墳時代前期～後期の古墳群からなる複合遺跡である。今回の調査地は、遺跡中央付近に位置する。東側隣接地の第31～33次調査では多くの集落関連遺構及び方墳等を検出している。

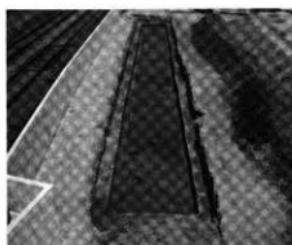
調査の成果 調査区南端で古墳時代の溝3条を検出した。うち1条には朝顔形埴輪を伴うことから、墳形不明の古墳周濠となる可能性が考えられる。

まとめ 今回の調査では、東側隣接地の第31次調査で検出した弥生時代末～古墳時代前期の集落関連遺構は希薄であることを確認した。

古墳時代の溝からは埴輪片が出土しており、古墳周濠の一部となる可能性が高い。ただし、墳形を推定するには情報不足である。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)



2. 調査区全景 (南から)

5. 泰楽寺遺跡 第4次調査

調査地の位置 調査は泰樂寺の北側にある農業用溜池の改修工事に伴うもので、今回の調査地は池の南岸にある。昨年度は池の北・西岸で調査を実施した。池西岸のトレンチでは古墳時代の石製玉類未成品等が出土し、当地で玉製作がおこなわれていたことが判明した。

調査の成果 調査では、西半を第7トレンチ、東半を第8トレンチとした。検出した遺構は古墳時代・古代・中世前期・中世後期・近世以降の各時期にわたる。

古墳時代では、調査区の第7トレンチの西半で柱穴や土坑、小溝を検出した。第7トレンチ中央から東は北東へ向かって落ち込む地形となる。遺構や遺物包含層からは多量の玉作関連遺物が出土しており、滑石製白玉及び未成品・管玉・勾玉・剣片、琥珀製小玉及び未成品・剣片、緑色凝灰岩製管玉・剣片、碧玉剣片、ガラス玉等がある。

古代の柱穴3基にはグリ石が残存しており、その上層には完形の土師器壺が出土した。平安初期のものとみられる。中世後期では溝や土坑、濠を確認した。土坑には木製の井戸枠が残存し、上層は瓦の大量廃棄がみられた。これら古代から中世の遺構は、泰樂寺及び泰樂寺城に関連する遺構である可能性が高い。

ま と め 本調査で検出した遺構は、古墳時代の集落関連のものと、泰樂寺（泰樂寺城）関連の遺構がある。

玉生産をおこなう古墳時代の集落は、地形の落ち込み際に形成されたことが判明した。また、遺構密度は第3次調査第6トレンチより高く、遺物包含層も良好に残存している。玉作関連遺物も本調査の方が多く出土している。土坑SK-7105からは玉作関連遺物とともに壺蓋が出土した。この一括出土遺物を得たことから、古墳時代中期中頃に玉製作をおこなっていたことが確実となった。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)



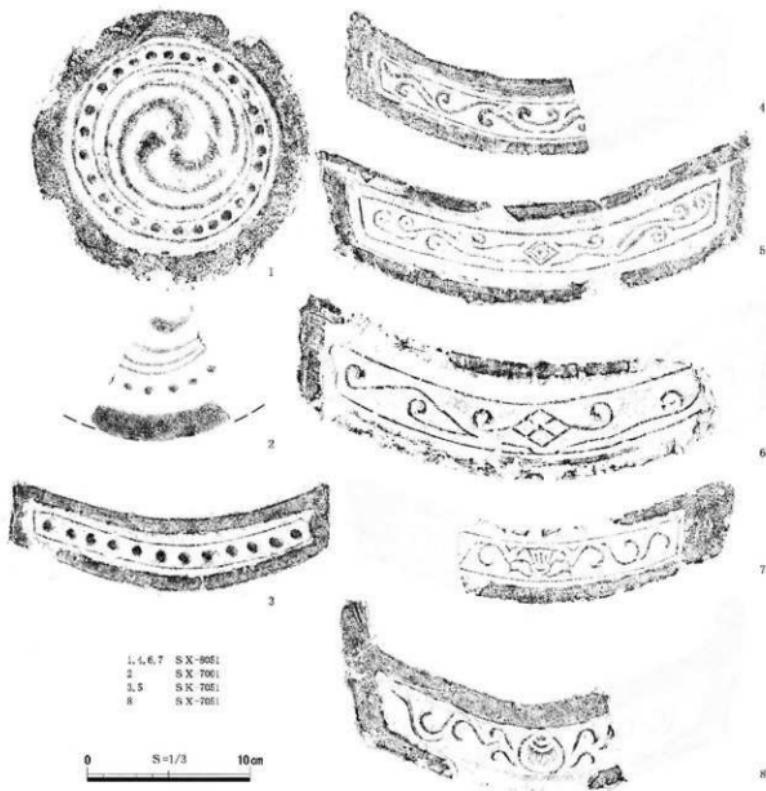
2. 第7トレンチ全景 (北西から)



3. 古墳時代の柱穴 (北西から)



4. 第8トレンチ全景 (西から)



秦楽寺出土の中世瓦

秦楽寺は大化三年（648）の創建と伝わる。中世には寺院勢力を拡大し寺を中心に「秦楽寺城」を形成するが、戦国期に戦火を受け、多くの堂宇が消失したという。

今回の調査では「秦楽寺城」の濠とみられる遺構や井戸を検出し、約40箱に及ぶ瓦が出土した。瓦の多くは被熱による変形・変色・煤の付着がみられる。落城後の灰燼処理として、破損した瓦を濠に廃棄したのかもしれない。

Column

秦樂寺遺跡 第4次調査
～中せ～

6. 法貴寺畜宮前遺跡 第8次調査

調査地の位置 法貴寺畜宮前遺跡は、奈良盆地の中央、標高48m前後の沖積地に位置する。今回の調査は遺跡南端での下水道工事に伴うものである。調査地の南西側で樅原考古学研究所が実施した第7次調査では、弥生時代中期の集落遺構を多数検出している。また、調査地北側には字ウミノヘを中心とする中・近世の集落跡「舞ノ庄遺跡」が拡がる。

調査の成果 北側の第1トレンチでは、中世の井戸1基を検出した。瓦賈の井戸枠を伴う。一方、南側の第2トレンチでは頗著な遺構を検出していない。

まとめ 調査の結果、北側の第1トレンチで中世の集落関連遺構を検出したものの、南側の第2トレンチでは頗著な遺構を検出しなかった。第1トレンチ付近まで舞ノ庄遺跡と一連の中世集落が拡がっていたものであろう。

1. 調査地の位置 ($S = 1/5,000$)

2. 中世の井戸 (東から)

7. 伊与戸遺跡 第2次調査

調査地の位置 伊与戸遺跡は、奈良盆地の中央、標高56m前後の沖積地に位置する。今回の調査は、遺跡東部での個人住宅建築に伴うものである。南側隣接地の伊与戸公民館はもと会所寺で、館内には鎌倉時代前期の如来形立像等が安置される。今回の調査地も以前は寺の敷地だったとのことである。

調査の成果 江戸時代の溝及び屋敷地の排水溝、室町時代後期の土坑・柱穴、鎌倉時代～室町時代頃の溝等を検出した。室町時代後期の柱穴には、宝篋印塔台座が礎石として使われていた。

まとめ 調査の結果、江戸時代の屋敷関連遺構、室町時代後期の屋敷（あるいは寺院）関連遺構を検出した。また、鎌倉時代～室町時代頃の溝は、初瀬川旧流路の一部が徐々に埋没していく過程で形成されたものとみられる。

1. 調査地の位置 ($S = 1/5,000$)

2. 調査区全景 (東から)

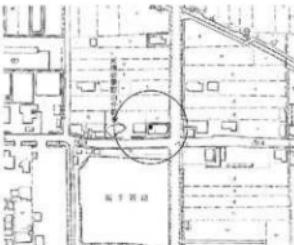
8. 阪手ハウズミ遺跡 第1次調査

調査地の位置 阪手ハウズミ遺跡は、奈良盆地の中央、標高51m前後の沖積地に位置する。これまで発掘調査はおこなわれていないが、北東に弥生時代中期の方形周溝墓群を検出した阪手東遺跡、西側に中世の寺院関連遺構の可能性がある阪手仁王前遺跡などが隣接する。

今回の調査は、遺跡北端における個人住宅の建築に伴うものである。建物建築予定地北西部に南北3.5m、東西2mの調査区を設定し、調査をおこなった。

調査の成果 調査区全体で、東西方向の中世素掘小溝7条を検出した。

ま と め 今回の調査では、顕著な遺構を検出することができなかった。遺物も少ないとから、遺跡としては周縁部であるとみられる。ただし、中世素掘小溝群の検出面は安定した黒褐色土層が括がり、微高地が括がっていたと考えられる。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)



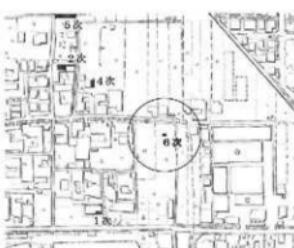
2. 調査区全景 (南から)

9. 常楽寺推定地 第6次調査

調査地の位置 常楽寺推定地は、標高47m前後の沖積地に立地する。中世の史料にみえる「常楽寺」の推定地として設定された遺跡である。今回の調査は遺跡東端での個人住宅建築に伴うもので、建築予定範囲の南西部に3.5×2mの調査区を設けて調査をおこなった。

調査の成果 調査の結果、中世～近世遺構面及び近世遺構面の2面で素掘小溝群を検出した。ただし、それ以外に顕著な遺構はみられず、調査地は中世以来の耕地であった可能性が高い。

ま と め 今回の調査では、常楽寺関連の遺構を検出することができなかった。付近には泥塔が多数出土した塚跡があるが、本調査地まで塚関連の遺構は括がっていないものとみられる。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)



2. 調査区全景 (東から)

10. 下ツ道 第3次調査

調査地の位置 今回の調査地は、西代集落の北端にあたる。本地の南側約150mで実施した第2次調査では中世の河道堆積を確認したのみで、顕著な遺構は検出していない。

調査の成果 清化槽設置部分について調査をおこなったところ、近世の溝1条と近代の素掘小溝を検出した。床土層直下はシルト層であり、第2次調査の中世の河道堆積に対応する層と考えられる。

ま と め 今回の調査においても、下ツ道に関連する遺構・遺物は確認されなかった。河道堆積層に削平を受けた可能性もあるが、状況は不明である。この河道は寺川の堆積層と考えられ、出土遺物から室町時代頃に現在の位置へ流れが変わったものと想定される。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)



2. 調査区全景 (東から)

11. 宮森遺跡 第1次調査

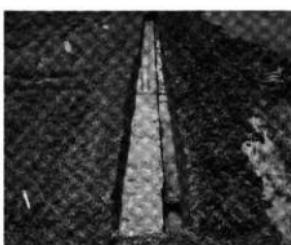
調査地の位置 宮森遺跡は、奈良盆地の中央、標高52m前後の沖積地に位置する。今回の調査は、遺跡北端での個人住宅開発に伴って実施した。擁壁部分で東西19m、幅1mのトレンチを設定し、調査を実施した。

調査の成果 調査により、東西方向の素掘小溝1条を検出した。中世～近世の耕作に伴う遺構であろう。また、調査地全体が中世頃の落ち込みで、厚さ0.4m前後の堆積層が調査地全体に拡がっていた。

ま と め 今回の調査では、顕著な遺構は確認できなかつた。平成19年度に西側隣接地で実施した下水道工事に伴う立会調査では、弥生時代の遺物を検出している。今回の調査でも弥生時代の遺物は出土しているが、遺構を確認するには至らなかつた。



1. 調査地の位置 (S = 1/5,000)

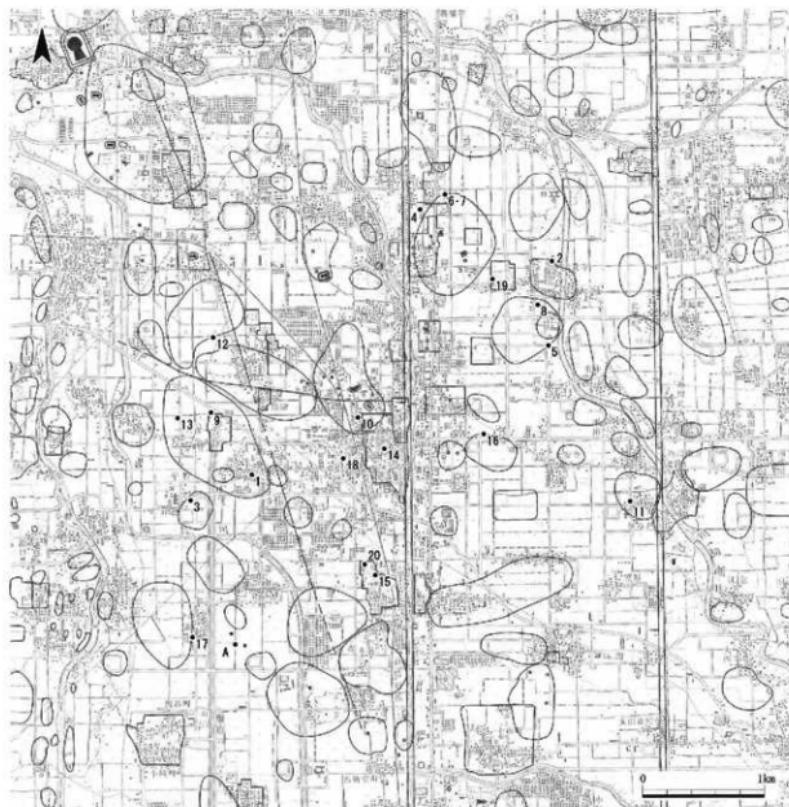


2. 調査区全景 (東から)

(2) 試掘調査・工事立会の概要

2008年度に実施した試掘調査は1件、工事立会は20件で、第7・8表に示すとおりである。团栗山古墳隣接地では占墳時代の溝を検出した。位置関係からこの溝は团栗山古墳に伴う遺構ではなく、新規確認の古墳と考えられる。

工事立会では、その多くが工事掘削の浅いものであったり、近世以降の擾乱を受けている状態であったりする場合が多く、ほとんど顕著な遺構を確認していない。このうち秦楽寺遺跡の工事立会(R-200815)は第4次調査と併行しておこなった一連の溜池改修工事で、古墳時代や中世の遺構を確認した。溜池東端では古墳時代後期の河跡を検出し、完形の須恵器大甕等が出土したことから、当時期の地形を推定する上でも重要な成果が得られた。



第6図 田原本町の遺跡と試掘調査・工事立会地点

第7表 2008年度 試掘調査一覧

	遺跡名	調査地	原因者	原因	進捗番号 (田政文発)	進捗日	調査日	調査面積	担当者	遺物量
A	团栗山古墳 (S-200801)	田原本町矢部382番1 西側道路	田原本町	道路改良工事	112	2008.11.20	2009.1.13 ～ 1.21	35sqm	清水	1箱

Y=26, 210

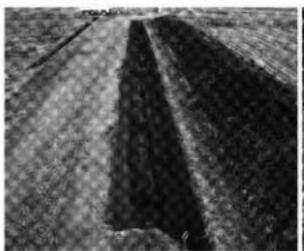
团栗山古墳 試掘調査 (S-200801)

調査地の位置 团栗山古墳は、奈良盆地の中央、標高50m前後の沖積地に位置する全長50m前後の古墳である。昭和11年の道路敷設工事時に土取りがなされ、高さ約3.6mの墳丘の大半が削平された。この時出土した遺物には須恵器、蛇形状鉄器、竜雀鏡頭、馬具等があり、いずれも東京国立博物館に収められている。

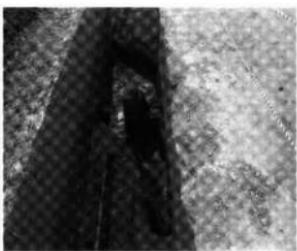
今回の調査は、古墳の西側約70mで実施した道路改良工事に伴い、团栗山古墳に最も接近する延長30m及び工区南端付近の延長5mで試掘調査をおこなった。調査区の幅は約1mである。

調査の成果 調査の結果、調査区北側で北西－南東方向の古墳時代後期の溝1条を検出した。幅2.5m、深さ0.8m。また、中世の小溝群を調査区全体で検出した。基本的に南北方向で、耕作に伴う溝とみられる。

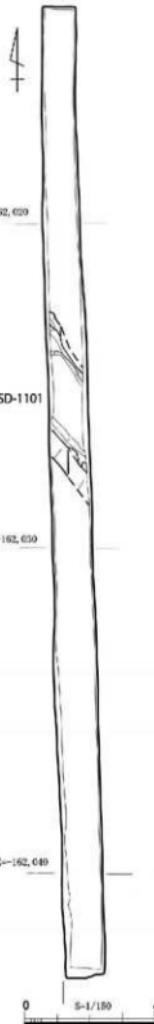
ま と め 調査の結果、古墳時代の溝1条を検出した。この溝の位置づけについては検討を要するが、团栗山古墳の周辺には「タカツキ古墳」などの古墳推定地が点在しており、周辺に展開する古墳群の一部である可能性も考えられる。なお、遺跡の異動届は平成21年度におこなっている（年報19所収予定）。



2. 調査区全景 (南から)



3. SD-1101 (北から)



4. 団栗山古墳造構図

第8表 2008年度 工事立会一覧

	議題名	開催地	座席者	工事の目的	進度番号 (注載文)	進捗日	立会者	調査日	内 容
1	十六両・兼工寺 (R-200801)	田原本町高木544-1	ファースト住建 (株)	分譲住宅の 建築	26	2008.4.28	清水	2008.5.20	傾斜汚く、地下遺構は不明。
2	法貴寺 (R-200802)	田原本町法貴寺461	個人	個人住宅の 建築	2	2008.4.10	清水	2008.6.16	既往な遺物數はみられない。今修復中で近前の河岸段階。
3	道御築き場 11- C 039 (R-200803)	田原本町下野123 南側道路地	田原本町長	下水道工事	10	2008.4.24	奥谷	2008.6.25 ~7.3	下水道立坑及び本築造時の廻廊工事に付合。近々一級代理と中見?堆積帯を検出。
4	ドフ電 (R-200804)	田原本町西古503 南側道路	田原本町長	下水道工事	14	2008.4.24	奥谷	2008.7.1	深さ0.8mに水生時代の遺物数が層と尋ねられる點を紹介。遺物出土せず。
5	第ノ庄 法貴寺宮古前 (R-200805)	田原本町法貴寺973 南側道路地	田原本町長	下水道工事	12	2008.4.24	奥谷	2008.7.3 ~11.6	深さ2.5mの工事床面高さ模擬地盤。
6	古井・猪 (R-200806)	田原本町宮古531-5	個人	掘削作業に付 う造成	74	2008.7.17	奥谷	2008.7.22	神社工事に立会。大字が既設本格により水平をうける。
7	古井・猪 (R-200807)	田原本町宮古532-2	宮古自治会長	掘削工事	76	2008.7.17	奥谷	2008.7.22	神社工事に立会。深さ0.2mの削除地盤。
8	法貴寺宮古前 (R-200808)	田原本町法貴寺177-1他 北側道路	田原本町長	下水道工事	46	2008.8.30	清水	2008.7.25 ~7.28	墳地防護での下水道管理工事。墳地防護の高さが中見。はかね塚な遺構なし。
9	十六両・兼工寺 (R-200809)	田原本町十六両1-1 (株)	スケーター 販賣の建築	32	2008.5.13	清水	2008.8.25	住棲地掘削時に立会。過去の既伐により、遺構は確認できない。	
10	羽子川 (R-200810)	田原本町319-320 合併3	個人	個人住宅の 建築	4	2008.4.17	奥谷	2008.10.2	差別的削除時に立会。深さ0.2~0.3mの削除で既伐なし。
11	伊豆ワツ (R-200811)	田原本町伊豆戸塚内	田原本町長	下水道工事	30	2008.4.24	奥谷 清水	2008.10.20 ~11.18	下水道立坑及び本築造時に立会。東南の道路の下水は既設清められて立坑化している。
12	宮古北 (R-200812)	田原本町宮古353-1 メイコ	(株) 関西 浄化槽の設 置	64	2008.7.14	奥谷	2008.11.1	浄化槽の設置、設置工事に立会。深さ1.5mで堆山層を確認。設置なし。	
13	十八両・鳥や寺 (R-200813)	田原本町十六両310-1	田原本町長	下水道工事	84	2008.8.13	豆谷	2008.12.3	既往基壠削除時に立会。掘削は深さ5mで既伐層内にとどまる。
14	寺内町 (R-200814)	田原本町619-1-2,620	個人	宮賀住宅の 建築	106	2008.11.4	清水	2008.12.8	既往基壠削除時に立会。掘削は深さ5mで既伐層内にとどまる。
15	索性寺 (R-200815)	田原本町索性206-1	田原本町長	健恵の改修	110	2007.1.24	奥谷	2008.12.24	前年冬掘削第4次調査と併行してここに立会した箇所内の発見に、東西・北東方へ向かう砂質地帯後頭部跡からは照葉樹大葉小立木、杉、小供木等を認定。
16	藍手のウツズミ (R-200816)	田原本町原手452-1	個人	個人住宅の 建築	110	2008.11.10	清水	2009.1.7	宅地造成に伴う掘削工事に立会。掘削は深さ3m、中見台面高さまで。
17	佐峰 (R-200817)	田原本町源田411-2	個人	個人住宅の 建築	102	2008.10.16	清水	2009.1.22	浄化槽設置に伴い立会。掘削深さは15cm。既蓄を遺棄・置きかわす。
18	- (R-200818)	田原本町159-8	田原本町長	既設整備事 業	-	-	清水 奥谷	2009.1.26	ボックスカルバート整備工事に立会。掘削方向の大字大構のほか、既蓄を掘削する。
19	丹波山 (R-200819)	田原本町法貴寺 984-2585-2587-2 改良区	合様留保土地 改良区	水路の改修	114	2008.12.11	清水	2009.3.17 ~3.18	コンクリート水路の設立・開削工事に立会。既伐?水路構造上にとどまる。
20	希志寺 (R-200820)	田原本町寺志225-3	個人	個人住宅の 建築	118	2008.12.16	清水	2009.3.16	浄化槽設置工事に立会。厚い中見?既蓄各層を確認。深さ1mで中見基盤検出面か。



II. 資料の整理と活用・普及

1. 文化財資料の整理・保管

(1) 埋蔵文化財の整理・保管

平成20年度の発掘調査・試掘調査等に伴い保管した埋蔵文化財は、遺物コンテナ約103箱とナイロン袋他で、遺物量は前年度より約45箱少ない。本年度の中で全体の4/5を占めているのが秦楽寺遺跡第4次調査である。この調査は秦楽寺北側での調査で、中近世の瓦が多量であったことによるものである。また、この調査では、古墳時代の玉作り関連遺物の出土に伴い、遺物包含層の土壤を土嚢袋1,500袋持ち帰り、当年度において約1,100袋を1mmの筋いきかけによる水洗をおこなった。しかし、残りの土壤水洗と玉の選別作業は後年度に持ち越すことになった。また、平成19年度に実施した同遺跡の第3次調査から出土した玉作り遺物17箱分（1mmの筋いきかけ後の土壤）の選別作業は当年度に実施し終了した。この遺跡以外の遺物洗浄は終了し、分別収納をおこなった。全体の種別内訳としては、中近世の土器類が大半を占めた。この他、木製品等があるが、わずかである。

【埋蔵文化財保管数】

調査番号	遺跡名	調査次数	遺物明細	遺物量	
				現場後	洗浄後 (土器・瓦)
H20-01	秦楽寺推定地	第6次調査	土師器・瓦器・瓦質土器等	1箱	1箱
H20-02	ドツ遺跡	第3次調査	土師器・瓦等	ナ小6袋	ナ小5袋
H20-03	羽子田遺跡	第34次調査	陶生土器・土師器・須恵器・埴輪等	3箱	3箱
H20-04	宮森遺跡	第1次調査	陶生土器・土師器・瓦器等	1箱	ナ小3袋
H20-05	宿古・鍵遺跡	第104次調査	遺物無	—	—
H20-06	麻手ホウズミ遺跡	第1次調査	土師器・瓦器・近世陶磁器等	1箱	ナ小4袋
H20-07	法貴寺廢宮南遺跡	第8次調査	土師器・瓦質土器・木製品等	6箱	6箱
H20-08	唐古・鍵遺跡	第105次調査	陶生土器・近世陶磁器・鐵・石器等	1箱	ナ小10袋
H20-09	唐古・鍵遺跡	第106次調査	陶生土器・土師器・瓦質土器等	1箱	1箱
H20-10	伊与戸遺跡	第2次調査	土師器・瓦質土器・石製品等	3箱	3箱
H20-11	秦楽寺遺跡	第4次調査	土師器・須恵器・瓦器・中世陶器・近世陶磁器・瓦・木製品・石製玉類未成品・ガラス玉等	83箱	洗浄中
S-200801	田栗山古墳	試掘調査	土師器・須恵器・瓦	1箱	1箱
R-200815	秦楽寺遺跡	工事立会	土師器・須恵器・黑色土器・瓦器等	2箱	2箱
T-200801	秦楽寺遺跡	踏査	土師器・須恵器・瓦器・瓦・石器等	ナ小7袋	ナ小7袋

*遺物量の表記の箱とは、長さ56cm・幅36cm・深さ15cmの容量を標準として換算している。また、「ナ中・小」は、ナイロン袋の中・小の大きさを表している。

【平成20年度調査の遺物種と数量】

調査番号	遺跡名	調査次数	土製品	焼土塊	本製品	石製品	骨製品	金属器	鉄貨	ガラス	木	石	磁器・貝	種子	炭化米
H20-01	常楽寺推定地	第6次調査	-	1	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
H20-02	下ツ道跡	第3次調査	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-
H20-03	羽子田遺跡	第34次調査	8	4	2	8	-	1	-	9	1	10	-	1	-
H20-04	宮森遺跡	第1次調査	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
H20-07	法貴寺廬宮前遺跡	第8次調査	-	-	□	-	-	-	-	-	6	1	-	18	2
H20-08	唐古・鍵遺跡	第105次調査	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
H20-09	唐古・鍵遺跡	第106次調査	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-
H20-10	伊与戸遺跡	第2次調査	-	2	-	2	-	-	-	-	1	7	-	-	-
H20-11	秦楽寺遺跡	第4次調査	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S-200801	团栗山古墳	試掘調査	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
R-200815	秦楽寺遺跡	工事立会	-	2	3	5	-	-	-	-	-	1	-	36	-
T-200801	秦楽寺遺跡	踏査	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-

* 少量遺物は、複数次数あるいは複数遺跡をまとめて分別収納しているため、コンテナ量で表すことができないので、有(○)無(-)で示した。また、数量は点数であるが、□内の数字はコンテナ量である。



秦楽寺遺跡第4次調査 土壌水洗

【平成20年度調査の図面・写真の保管数量】

調査番号	遺跡名	調査次数	図面		35mm			
					カラーポジ		モノクロネガ	
			現場	遺物	シート数	コマ数	シート数	コマ数
H20-01	常楽寺遺跡	第6次調査	2	-	2	25	1	25
H20-02	下ノ道遺跡	第3次調査	3	-	2	36	1	36
H20-03	羽子田遺跡	第34次調査	12	-	5	92	3	92
H20-04	宮森遺跡	第1次調査	2	-	2	26	1	26
H20-05	唐古・鍵遺跡	第104次調査	1	-	1	8	1	8
H20-06	阪手ホウズミ遺跡	第1次調査	2	-	2	33	1	32
H20-07	法貴寺高宮前遺跡	第8次調査	3	-	2	40	1	36
H20-08	唐古・鍵遺跡	第105次調査	5	-	3	54	2	56
H20-09	唐古・鍵遺跡	第106次調査	2	-	2	27	1	28
H20-10	伊与川遺跡	第2次調査	3	-	4	64	2	64
H20-11	秦安寺遺跡	第4次調査	29	-	32	625	18	631
S-200801	岡東山古墳	試掘調査	6	-	5	100	5	100
計			70	0	62	1,131	37	1,134

(2) 資料の撮影と写真・図面のデジタル化

写真撮影は、十六面・薬王寺遺跡の木棺等と企画展に伴う遺物の撮影をおこなった。また、羽子田遺跡と十六面・薬王寺遺跡の発掘調査の遺構写真と唐古・鍵考古学ミュージアムの展示品写真的デジタル化をおこなった。

【写真撮影一覧】

名 称	資料名・内容	フィルム (4×5)	カット数	備 考
十六面・薬王寺遺跡	木棺	カラーポジ モノクロネガ	2 5	報告書用
唐古・鍵遺跡	弥生土器(文様)	カラーポジ	26	秋季企画展
田原本寺内町遺跡 平野氏陣屋跡	摺鉢・焼塙甕・石板等	カラーポジ	12	
秦安寺遺跡	工作り関係・瓦	カラーポジ	3	春季企画展
柳本陣屋跡他	家紋瓦・染付大皿他	カラーポジ	9	
計		カラーポジ モノクロネガ	52カット 5カット	

【デジタル化一覧】

内 容		カラーポジ(4×5)	成果品
羽子田遺跡 第30・31次調査 十六面・薬王寺遺跡 第24次調査	発掘調査遺構写真	21枚	DVD 1枚
唐古・鍾遺跡	ミュージアム展示品	85枚	DVD 2枚
古文書	豊臣秀吉感状	9枚	DVD 1枚
田原本寺内町遺跡他	春季企画展写真	22枚	DVD 1枚
計		137枚	DVD 5枚

(3) 資料の寄贈・購入と図書の受領

吉川元明氏より資料の寄贈を受けた。また、体験学習用教材（備品）として、桜ヶ丘4号銅鐸の復元品を有和銅窯より購入した。

資料名	登録番号	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)	備考
褐鉄鉢	MX-標本-0011	9.5	10.8	8	594.1	産地不明・一部欠
復元銅鐸	MR-復元-0093	21.8	14.3	39.4	3,539	舌含・桜ヶ丘5号銅鐸



褐鉄鉢

復元銅鐸

平成20年度は、関係諸機関・個人（289機関等）から1,158冊の図書の寄贈を受けた。また、図書の購入は13冊である。

【受領図書】

分類	報告書	概報	現況資料	年報	館報	図録	パンフレット	紀要	会報
冊数	654	80	3	70	15	51	59	35	7
分類	論文集	たより	発表資料	単行本	雑誌	目録	その他	合計	
冊数	6	91	17	13	7	7	43(4)	1,158	

上記冊数には、2部以上の寄贈123冊を含んでいない。（）の数字は、CD-ROM 1枚、DVD 3枚の内数である。

2. 遺跡・文化財の保護

(1) 史跡の公有化

唐古・鍵遺跡は、平成11年1月27日、唐古池を中心とする範囲の98,957.73m²（159筆）について国の史跡指定を受けた。また、平成14年12月19日には、鍵地区において検出した弥生時代中期初頭の大型建物跡部分を含む1,857.93m²（鍵248番2他7筆）を、平成20年3月28日には1次指定を受けた南端の一部と平成14年の追加指定を受けた土地の東側隣接地について、追加指定を受けた。この結果、唐古・鍵遺跡の指定面積は、102,248.98m²になった。

平成20年度の公有化は、396.69m²で、全公有化面積の約98%となった（唐古池、里道、水路除く）。

【史跡の公有化面積】

年 度	地 番	面 積
11~19年度	唐古 50番2ほか計 78筆	
	鍵 225番1ほか計 50筆	68,979.11m ²
20年度	鍵 300番1 1筆	396.69m ²
合 計	計129筆	69,375.80m ²



唐古・鍵遺跡の指定地状況

(2) 町指定文化財

平成20年度において、下記文化財の古文書1件（2通）を田原本町文化財保護審議会に諮問した。当審議会の答申を受け、町の指定文化財として台帳に登録した。これで町指定文化財は、4件となつた。

【田原本町文化財保護審議会 委員】

分野	氏名	備考
建築	林 清三郎	委員長
考古学	石野 博信	
考古学	寺澤 薫	
歴史	和田 草	
歴史	谷山 正道	
彫刻	鈴木 喜博	



審議会風景

【町指定文化財一覧】

台帳番号	種別	名称及び員数	所有者	時代	指定年月日
1	有形文化財 (考古資料)	「樓閣」が描かれた土器片 3点 唐古・鍵遺跡第47・77次調査出土	田原本町	弥生時代（中期）	
2	有形文化財 (考古資料)	翡翠製勾玉と鳴石容器（蓋付）一式 唐古・鍵遺跡第80次調査出土 1. 翡翠製勾玉 2点 1. 鳴石容器 1点 1. 容器蓋（土器亮片）1点	田原本町	弥生時代（中期）	平成20年 3月24日
3	有形文化財 (彫刻)	木造十一面觀音立像 一軀	法貴寺 自治会	室町時代 (天文10年／1541年)	
4	有形文化財 (古文書)	平野権平（長泰）宛豊臣秀吉感状 1. 平野権平宛羽柴秀吉判物 (天正十一年六月五日) 折紙1通 2. 平野権平宛豊臣秀吉朱印状 (文禄四年八月十七日) 折紙1通 附 収納箱 内箱・外箱 包紙（2枚2枚有り）	福岡洋介	1. 安土桃山時代 (天正11年／1583年) 2. 安土桃山時代 (文禄4年／1595年)	平成20年 12月17日

1. 平野権平（長泰）宛豊臣秀吉感状

種 別 有形文化財（古文書）

名称及び員数 平野権平（長泰）宛豊臣秀吉感状

1. 平野権平宛羽柴秀吉判物（天正十一年六月五日）折紙1通

2. 平野権平宛豊臣秀吉朱印状（文禄四年八月十七日）折紙1通

附 収納箱 内箱・外箱 包紙（2は2枚有り）

所 在 地 磐城郡田原本町434番

所 有 者 福岡洋介

所有者の住所 磐城郡田原本町434番

法 量 1. 縦31.7cm・横50.2cm

2. 縦46.3cm・横66.5cm

時 代 1. 安土桃山時代（天正11年／1583年）

2. 安土桃山時代（文禄4年／1595年）

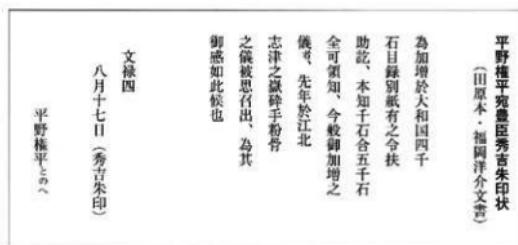
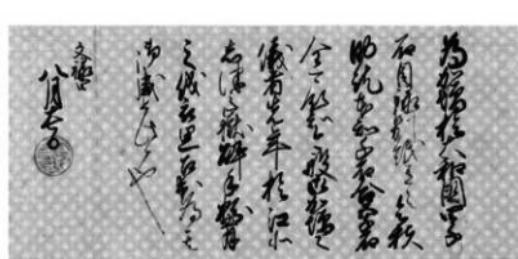
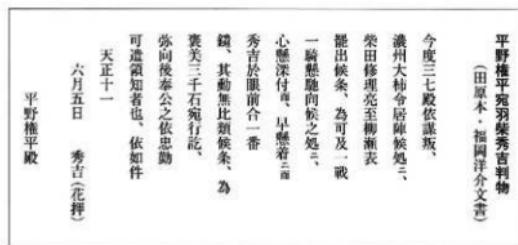
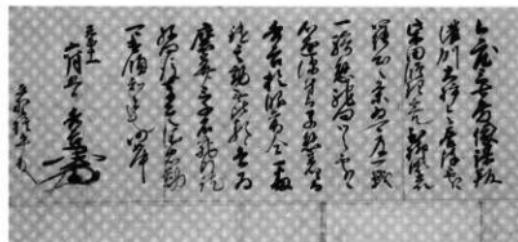
説 明 本町の歴史、とりわけ近世の歴史は、田原本村に陣屋を構え、町場の育成を図るとともに、本町域内に所在した5000石の領地の支配をおこなっていた旗本平野氏の存在を抜きにして語ることはできない。

後に本町域内に知行地を与えられるようになる平野権平（長泰）は、尾張国の出身で、羽柴（豊臣）秀吉に仕え、天正11年（1583）4月の賤ヶ岳の合戦では、福島正則・加藤清正とともに「七本槍」の一員として活躍し、その名を天下にとどろかせた。

1は、この合戦で軍功をあげた権平に対する秀吉の感状（同年6月5日付）で、褒美として「三千石」の知行を宛行うとされている。このとき宛行われたのは、本町域内の村々ではなかったが、著名な「賤ヶ岳の七本槍」の一員に対する秀吉の感状として、全国的にも注目される史料である。

権平は、その後秀吉の勘気をこうむり、知行高も1000石に減らされていたが、大和国總檢地がおこなわれた文禄4年（1595）に賤ヶ岳の旧功を嘉賞され、4000石を加増されるようになった。

2は、このときの豊臣秀吉の感状（同年8月17日付）で、加増に伴って権平の知行高は5000石となった。残念ながら、2の文中に「別紙」とある知行「日録」の現物は残っていないが、その写（同年9月21日付）によれば、「十市郡」の「佐味村」「竹田村」「保津村」「田原本村」「薬王寺（村）」「神（秦）栗寺村」「飯高村之内」で合わせて「五千石」となっている。この後、分村によって満田・十六面・九品寺の3ヶ村が成立し、平野氏領は10ヶ村となるが、惣領地高は慶応4年（1868）7月に倍増し田原本藩が成立するまでは不変であった。2は、本町域内に平野氏領5000石が成立するに際して出された感状であり、本町にとって大変貴重な史料といえる。



3. 講 座

成人向けの講座として、考古学実践講座の中級編と実験考古学編を計5回実施した。また、小中学生向けの体験講座を夏休みと春休みに、親子参加体験イベントを秋に開催した。

【考古学実践講座】

実施日	講座名	内 容	講 師	受講者数
6月14日（土）	講座Ⅱ 中級編	魏志倭人伝と 考古学	『魏志』倭人伝とは	本館 河森 33名
7月12日（土）			倭人の風貌	本館 藤田 36名
8月9日（土）		東夷世界の建築文化と 「楼閣」絵画	東夷世界の建築文化と	本館 河森 33名
2月7日（土）			「楼閣」絵画	
3月7日（土）	講座Ⅲ 実験考古学編	石器をつくる	縄文・弥生時代の石器	本館 藤田 20名
			石器をつくる（実習）	香芝市教育委員会 佐藤良二氏 19名
5日間			5講座	141名

【チャレンジ子ども弥生探検隊】

実施日	内 容	会 場	参 加 者 数
7月25日（金）	体験講座	埴輪づくりに挑戦	陶芸室 21名
8月6日（水）		埴輪づくりに挑戦	陶芸室 27名
8月20日（水）		勾玉づくりに挑戦	陶芸室 25名
3月25日（水）		上器の復元に挑戦	陶芸室 23名
11月29日（土）	弥生生活体験 イベント	お米の脱穀・赤米炊飯・火燃し 唐古・難遺跡現地	親子33名
5日間		7メニュー	129名



考古学実践講座Ⅲ



埴輪づくりに挑戦

4. 学校教育への支援

(1) 小学校出前授業・教材貸出

町内各小学校からの依頼を受け、総合的学習の時間及び社会科・家庭科等の授業として、以下内容の出前授業をおこなった。特に北小学校では、5年生の家庭科において「貢頭衣づくり」が実践された。

中学校では社会科の授業用教材として、高取中学校へ初圧真土器や炭化米など13点の遺物・複製品・写真パネル等を貸出した。

【出前授業】

実施日	学校・学年	児童数	内 容
4月28日	南小学校 6年	2クラス(46名)	唐古・鍵遺跡の説明
11月14日			土器づくり
12月4日			土器の野焼き・火熾し
5月16日	北小学校 6年	2クラス(42名)	土器づくり
6月6日			火熾し・赤米炊飯・脱穀
6月27日			勾玉づくり・土器の野焼き
10月22日			食育(弥生の食のはなし)
10月8日	北小学校 5年	2クラス(48名)	家庭科「貢頭衣づくり」
10月22日			
5月14日	平野小学校 6年	2クラス(63名)	土器づくり
5月20日			唐古・鍵遺跡の現地説明・ミュージアム説明
6月20日			土器の野焼き・火熾し
12日間		8クラス(延べ591名)	メニュー延べ17



小学校出前授業（北小学校）



小学校出前授業（南小学校）

(2) 中学校職場体験学習

中学生の職場体験学習として、田原本中学校・北中学校の生徒を受け入れ、文化財保存課と唐古・鍵考古学ミュージアムで体験学習を実施した。

【体験学習】

期 間	学 校 名	内 容	人 数
11月 5・6・7日	北中学校	土器洗浄・遺物選別・石器の整理	4名
11月11・12・13日	田原本中学校	土器拓本・ミュージアム受付	4名
6日間	2学校	10メニュー	延べ24名



中学校職場体験学習（北中学校）



中学校職場体験学習（田原本中学校）

(3) 大学の学外授業

博物館実習として、大学生4名を受け入れ、下記内容の授業をおこなった。また、奈良大学の通信教育の課外授業として、4回受け入れた。

【博物館実習】

実 施 日	内 容	受講者数
9月2日（火）	ミュージアムの概要（ガイダンス）・写真撮影方法	
9月3日（水）	夏季ミニ展示の片付け 遺物収納の仕方と展示遺物カードの作成	同志社大学 3名 京都女子大学 1名 計 4名
9月4日（木）	遺物の写真撮影方法・子供向け解説シートの作成	
9月5日（金）	ホームページ・解説パネル・チラシの作成	
4日間		延べ16名

【学外授業】

実施日	内 容	人 数
7月20日（日）	奈良大学 通信教育過程「文化財学講義Ⅱ」 唐古・鍵遺跡の現地説明 唐古・鍵考古学ミュージアムの概要説明・展示品解説	120名
8月30日（土）		59名
2月14日（土）		23名
3月14日（土）		25名
4日間		計227名

(4) 講師の派遣

上記以外に、教育委員会等の事業として下記のとおり職員を派遣した。

実施日	講座名等	人数	演 題	講 師
6月18日（水）	磯城郡小学校社会科研究会	12名	総合的な学習における唐古・鍵遺跡の活用	藤田 三郎
7月9日（木）	高齢者学級（生涯学習課）	122名	食文化を通してみた日本と中国	河森 一浩
2月13日（金）	郷土の歴史教室（生涯学習課）	65名	銅鐸をつくる	藤田 三郎



博物館実習



奈良大学通信教育

5. 刊行物一覧

本年度は、下記5点の書物を印刷・増刷した。

【刊行物名】

書籍名	発行日	部数	内容
唐古・鍵考古学ミュージアム 春季企画展図録「瓦に込めた想い」	2008年4月	3,000部	町内寺社の鬼瓦と記名鬼瓦の紹介 平成19年度の発掘調査成果
唐古・鍵考古学ミュージアム 秋季企画展図録「弥生デザイン」	2008年10月	3,000部	弥生～古墳時代の考古遺物に描かれた文様 を紹介
田原本の遺跡4 弥生の絵画	2009年1月	2,000部	第2刷
唐古・鍵考古学ミュージアム 『ミュージアムコレクション Vol.2』	2009年3月	2,000部	町広報（平成18年9月号～平成21年1月 号）に掲載したミュージアムコレクション の補訂版
『田原本町文化財調査年報17 2007年度』	2009年3月	700部	平成19年度の文化財事業の報告

なお、印刷発注はおこなわなかったが、下記の展示解説シートを作成した。

夏季ミニ展示解説シート『田原本の遺跡Vol.4 唐古・鍵遺跡－古墳と中世居館－』

(2008年7月)

冬季ミニ展示解説シート『ミュージアムの収蔵品Vol.4 石の道具－弥生から近世まで－』

(2009年1月)



6. 資料の活用

(1) 資料の貸出

平成20年度は、10機関に延べ15遺跡207点の遺物等を貸出した。貸出内容は、唐古・鍵遺跡の出土品が半数を占める。唐古・鍵遺跡では絵画土器の貸出が多い。また、石器の点数が多いが、これは秦樂寺遺跡の玉作り関係遺物を一括貸出したことによるものである。

【資料貸出一覧】

貸出先／展示会名／期間	運送名	資料名	点数
九州国立博物館 交流展示『海の道、アジアの路』(短期貸出) 【貸出期間】平成20年4月8日～平成21年2月13日	唐古・鍵遺跡	伊勢湾岸地方の壺(1)・伊勢湾岸地方の厚口鉢(1)・近江地方の壺(1)・土器勾玉(1)・調査(1)	5
九州国立博物館 交流展示『海の道、アジアの路』(長期貸出) 【貸出期間】平成20年4月8日～平成22年3月33日	唐古・鍵遺跡	弥生中期窯場(1)・弥生中期鉢(1)・弥生中期水差形土器(1)・長頸壺(8)・輪面土器片(4)・絵画土器(4)・絵画土器(レプリカ)(1)・側鋸形土器(1)・流紋岩石塙(1)・結晶片岩石塙(1)・真岩石塙(1)・平底(1)・一本脚(1)・堅作(1)・候松(1)・方形容器(1)・丸(1)・合子(1)・合子蓋(1)・鑿(1)・櫛箋(1)・描かれた絵画土器(レプリカ)(2)・大型上部側鋸形外舟(1)・土製武器鉗型外舟(1)・土製不明鉗型外舟(1)・高环形土器(1)・網敷(2)・鉢形付舟(1)・送風管(2)・褐鐵鉢容器(レプリカ)(1)・褐鐵鉢容器(レプリカ)(1)・韁革製勾玉(レプリカ)(2)	50
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 春季特別展「はにわ人と動物たち－大和の埴輪ダイジェスト－」 【会 期】平成20年4月19日～6月15日 【貸出期間】平成20年4月9日～6月25日	垂御山2号墳 小阪單中遺跡 羽子田遺跡 唐古・鍵遺跡 保津・宮古遺跡	1号人物埴輪(1)・1号馬形埴輪(1)・笠形木製品(2) 屋形埴輪(1) 宿持人埴輪(2) 馬形埴輪(1)・家形埴輪(1)・1号蓋形埴輪(1) 舟形埴輪(1)	4 1 2 3 1
奈良国立博物館 特別陳列「建物を表現する－弥生時代から平安時代まで－」 【会 期】平成20年6月14日～7月13日 【貸出期間】平成20年5月21日～7月25日	唐古・鍵遺跡 清水風遺跡	輪面土器(3)・櫛箋(1)・描かれた絵画土器(3) 絵画土器(1)	6 1
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 巡回展「大和を撰る26—2007年度奈良県巡回展在籍展一」 【会 期】平成20年7月19日～9月7日 【貸出期間】平成20年7月10日～9月9日	秦樂寺遺跡	素材(滑石)(24)・滑石削片(2)・素材(碧玉)(3)・素材(グリーンタフ)(1)・グリーンタフ側片(2)・水晶削片(1)・琥珀削片(1)・滑石盤及孔円板(1)・滑石製勾玉未成品(1)・流紋岩製勾玉未成品(1)・滑石製管玉(1)・滑石製管玉未成品(2)・滑石製口玉(14)・滑石製口玉未成品(24)・琥珀製丸玉(2)・琥珀製丸玉未成品(5)・砾石(3)・下砾石(3)・台石(1)	92

太子町立竹内街歴史資料館 平成20年度金剛展「変貌するサスカイト～その陸奥と 其焉～」 【会期】平成20年10月1日～12月7日 【貸出期間】平成20年9月23日～12月14日	唐古・鐵道跡	打製石剣(2)・桜の皮を紐状にして巻いた柄付き の石小刀(1)・船入り石劍(1)・精(1)	5
尼崎市立能登資料館 第38回特別展「彌生の技」 【会期】平成20年11月11日～12月14日 【貸出期間】平成20年11月4日～12月19日	唐古・鐵道跡	ガラス製丸玉(2)・ガラス製土(再加T品)(1)・ 磁束(1)・高环形土製品(1)・十翼武器鉄型外神 (3)・延滞付真土(1)・調塊(1)・石製鋼錠鉄型 片(1)・右翼鋼錠鉄型(レブリカ)(1)・鋼錠鉄 型(レブリカ)(2)・十翼鋼錠鉄型外神(3)・送 風管(3)	20
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 平成20年度特別陳列「牛にひかれて博物館」 【会期】平成20年12月13日～平成21年1月18日 【貸出期間】平成20年11月19日～平成21年1月29日	平野氏陣屋跡	牛土製人形(1)	1
大阪府立糸島文化博物館 平成20年度冬季特別展「倭人がみた竜一竜の絵とかた ちー」 【会期】平成21年度1月24日～3月15日 【貸出期間】平成21年度1月8日～3月19日	唐古・鐵道跡	輪岡土器片(2)・弧帯文を描いた広口壺(1)・長 頭面(2)・弧帯文を描いた台付小形罐(1)	6
鳥取県立古代出雲歴史博物館 平成20年度金剛展「輝く出雲ブランド—古代出雲の玉 作りー」 【会期】平成21年3月7日～5月18日 【貸出期間】平成21年2月28日～5月1日	唐古・鐵道跡	水基製丸玉(4)・紫翠製勾玉(3)・翡翠製丸玉 (1)・船扶鉢容器蓋(1)・褐鉢鉢容器(1)	10
10機関延べ会期期間目数401日	延べ15遺跡		207点

【種別による貸出点数】

土器	埴輪	土製品	石器	木器	金属器	牙角 製品	ガラス	骨・貝	種・穀物	レブリカ 模型	総点数
39	9	21	108	12	6	0	3	0	1	8	207点

【資料の継続貸出】

貸出先・展示名・期間	遺跡名	資料名	点数
香芝市上山博物館 常設展示 【貸出期間】平成19年4月1日～平成20年3月31日	唐古・鐵道跡	弥生土器壺・壺・高环 船先形石器	4点
大阪府立糸島文化博物館 常設展示 【貸出期間】平成19年4月1日～平成20年3月31日	唐古・鐵道跡	土器	3点
2件	延べ2遺跡		7点

(2) 写真掲載・撮影

写真の貸出及び掲載（転載含む）は39件89点であった。写真掲載の内容は、唐古・鍵遺跡の出土品が中心で、「樓閣が描かれた土器片」や「復元樓閣」の利用度が高い。また、羽子田1号墳の埴輪も比較的多く許可した。

【写真掲載・撮影一覧】

貸出先	掲載書籍	名称（遺跡名）	資料名	点数
㈱クリエイティブアダック	広報リーフレット「大和川クニストカード」	唐古・鍵遺跡	模擬が描かれた上器・復元樓閣	2
学校法人河合塾	2008年度第2回令統マーク模試	唐古・鍵遺跡	模擬が描かれた上器・復元樓閣	2
産業新聞中四支社	日刊 産業新聞 連載「歴は風」	唐古・鍵遺跡	馬車製勺下を収めた馬糞軸容器	1
鶴永 修	『遠聞 日本の仏像』50号	多神社	太安万恒像	1
探ぼ山間	『季刊 考古学』104号	唐古・鍵遺跡	平倉・一本鳥	2
徳間成社	『出生時代の考古学』 第8巻	唐古・鍵遺跡	大型建物柱・大型建物下脚圓・施65次調査追跡平面圖・唐古・鍵遺跡測量配図	4
個人	第9回田原本町少年野球報告大会パンフレット		楼閣くんキャラクター	1
鳥取県埋蔵文化財センター	青谷上守寺地遺跡フォーラム資料集「出生の宝～花方萬葉とその背景～」	唐古・鍵遺跡	蓋付萬葉・蓋付四脚容器	2
㈱ロム・インクーナショナル	「古代史の謎がわかる本」	唐古・鍵遺跡	復元樓閣	1
青谷上守寺地遺跡展示館	『出生のファッショーン』パネル展示	唐古・鍵遺跡	さまざまな装身具・大麻製布切れ	2
大阪府近つ飛鳥博物館	秋季特別展「考古学からみた古代女性」パネル展示・図録	唐古・鍵遺跡	鳥袋の系女が描かれた土器	1
朝日新聞奈良総局	「奈良を学ぶ」朝日新聞	唐古・鍵遺跡	長瓶瓶（内縫と外縫の記号）・広口壺（直縫の記号）・瓶塞（内縫の記号）	3
㈱大塚製漆工場	雑誌「大塚漆報」2008年10月分	唐古・鍵遺跡	市の様子懐恋圖・唐古・鍵遺跡復元懐恋圖・平倉未成品	3
太予町立竹内街歴史資料館	平成20年度企画展「実現するサスカイト～その隆盛と終焉～」	唐古・鍵遺跡	箱入り石刀・木製柄石刀小刀・石剣(2)・打製石器の製作	5
FMラジオ	フリーベーバー「レジオン」		楼閣くんキャラクター	1
㈱講談社	学術文庫「王権誕生」	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた上器	1
大阪府立吹田文化博物館	平成20年度冬季特別展図録「倭人がみた竜一竜の繪とかたち一」	唐古・鍵遺跡	繪圖十幅（鹿）(2)・絵岡上器（弧帶文）(2)・記号文十器(2)	6
㈱テレビマン	世界ふしぎ発見!「那馬古國編」	唐古・鍵遺跡	復元樓閣	1
㈱木原立なす風土記の丘資料館	「土を考古学する」パネル展示	羽子田1号墳	牛形埴輪	1
㈱小学館	ビジュアル版「述説の日本史」	唐古・鍵遺跡	楼閣が描かれた上器	1
㈱丸善	『日本のかたち百科』	唐古・鍵遺跡	彌命文様をもつ壺	1
㈲キックオフプラス	（仮）「資料・日本の遺跡と遺産」第1巻「縄文と弥生の遺跡」	唐古・鍵遺跡	復元樓閣・楼閣が描かれた土器・石庭工の製作工程・弥生土器の用途と形・鏡と盤伴・鏡・土製焼帯の外縫・装身具	8
鳥取県教育委員会 資本営田遺跡事務所	「社会科学教育」11月号	唐古・鍵遺跡	手を掌げる人物(3)	3
		清水風遺跡	盾と戈を持つ人物(大)・手を掌げる鳥袋のシャーマン模型・盾と戈を持つ人物模型	3

木下市歴史館	淀江歴史民俗資料館企画展 『美の神々を求めて』パネル	唐古・鍵造跡	銅鋳形土製品	1
山本出版	『両面の神々—飛脚の宿禰伝承を追う』	清水風造跡	盾と戈を持つ人物	1 軒表
奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	『牛にひかれて博物館 十二支の考古学 午』 図録	平野氏陣屋跡	牛形七製品	1
近鉄ニュース社	『近鉄ニュース』2009年1月号	羽子田1号墳	牛形埴輪	1
財團法人 元興寺文化財研究所	平成21年度 年賀状	羽子田1号墳	牛形埴輪	1
柳東京美術	(仮)「はにわのひみつ」	佐野山2号墳	船頭と馬曳き人物、入墓の人物	2
学びの支援コンソーシアム事務所	インターネットのデータベース『マナビゲット』	羽子田1号墳	入墓をした船持人物	1
大阪府立弥生文化博物館	平成21年度春季特別展「弥生建築—半島呼のすまい—」	唐古・鍵造跡	唐古・鍵造跡ミュージアム入口 ミニージアム 写真・復元模型	2
御中央公論新社	『車塚と古代大和の宮王』	唐古・鍵造跡	ケヤキ原本の出土状況、翡翠製勾玉を収めた陶瓶或容器	2
御山川出版社	『日本史人物リブレット』1 「半島呼と豪尙」	唐古・鍵造跡	復元模型・櫻閣が描かれた上器	2
奈良県立民芸博物館	映像資料『竹籠づくり』	唐古・鍵造跡	笑の出土状況写真、農具の出土状況	2
舞鶴倉出版	2010年マーク式総合問題集日本史B	唐古・鍵造跡	櫻閣が描かれた上器・復元模型	2
南エディットサボウ/筑波書社	『選刊 世界百不思議』8号	唐古・鍵造跡	木棺蓋人骨・複数模型・鳥殻の原女性型・遺跡風景写真・翡翠製勾玉	5
中央大学通信教育部	通信教育部教科書『歴史(日本史)』	唐古・鍵造跡	唐古・鍵造跡の環塗集落復元イラスト	1
㈱エヌ・ティー・エス	『鳥の骨探』	唐古・鍵造跡	鳥の脊椎標本	1
朝日新聞社出版部書籍編集部	『発掘された日本列島2009』	唐古・鍵造跡	石製銅鋳鉢型・土製武器鉢型外枠・土製不明鏡型外枠	3
39件		延べ43遺跡等		89点

(3) 資料調査

本町所有・保管遺物について、下記の者による資料調査があった。調査は、唐古・鍵造跡の出土品を中心である。

【資料調査】

調査日	調査者	資料名
4月9日～12月19日	東島沙恵作(奈良女子大学)	唐古・鍵造跡 動物骨
6月27日	キム・ディング(ペトナム考古学研究所)	唐古・鍵造跡 痛學製勾玉
6月29日	鶴柄俊夫(同志社大学)	唐古・鍵造跡 弥生土器
7月9日	金鐘萬(国立扶餘博物館)	唐古・鍵造跡 陶質土器
8月19日	南健太郎(熊本大学大学院)	唐古・鍵造跡 巴形銅器他
8月28日	山中一郎(京都大学) 栗田義(富田林市教育委員会)	唐古・鍵造跡 打製石戈と柄
9月25日 11月22日	丸山真央(京都大学大学院)	唐古・鍵造跡 魚骨
11月23日	深澤芳樹(奈良文化財研究所)ほか	唐古・鍵造跡 絵画十器

7. ボランティア組織

(1) ボランティア組織の概要

唐古・鍵遺跡を総合的に支援する任意ボランティア組織として、平成16年4月10日、「唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」(愛称：唐古・鍵支援隊)が設立された。平成20年度の会員は、49名である。

主な活動は、唐古・鍵考古学ミュージアムの展示説明ガイドや小学校の総合的学習の支援や子ども会等を対象とした考古学体験、ミュージアムへの勧誘活動、文化財保存課(ミュージアム)主催事業への支援などがある。活動については、4月の総会を経て、月例の運営委員会で検討され実施されている。また、「ものづくり教室」の部会では、新しい体験学習メニューの開発や体験学習教材の整備など月2回おこなわれている。

【唐古・鍵支援隊の支援活動】

活動日	内容	主催	支援内容	活動人数
4月26日・5月10日・6月7日・10月26日 計4日	春秋季企画展 講演会・報告会・ガイド研修会		受付	6人
6月14日・7月12日・8月9日 2月7日・3月7日 計5日	考古学実践講座	文化財保存課	受付	10人
7月25日・8月6日・8月20日 3月25日 計4日	チャレンジ子ども弥生探検隊(埴輪づくり・勾玉づくり・土器復元)		支援	18人
11月29日	弥生生活体験イベント		支援	16人
5月14日・5月16日・6月6日・ 6月20日・6月27日・10月1日・ 10月8日・10月22日・11月7日・ 11月14日・12月4日 計11日	総合的学習(土器づくり・火燃し・炊飯・脱穀・質頭衣づくり)	北小学校 平野小学校 南小学校	支援	78人
11月2日	文化祭(絵画グラスアート)	生涯教育課	支援	10人
9月19日・10月12日・12月22日 計3日	勾玉づくり 絵画グラスアート	西竹田・大木各子ども会	支援	10人
10月18日・10月25日 計2日	かしまら探検隊(火燃し・絵画グラスアート)	櫻原市教育委員会	支援	16人
延べ31日		8団体		164人

【唐古・鍵支援隊の主要活動】

活動日	内 容		活動人数
4月19日	総会	19年度事業報告・20年度事業計画等	26人
毎月第3土曜日	定例運営委員会	活動内容の相談・報告等(延べ12回)	121人
4月5日・10月11日 3月26日	唐古・鍵遺跡 現地ガイド	唐古・鍵遺跡の案内 (3日／ガイド数145人)	30人
毎月第2・4土曜日 臨時	ものづくり部会	体験学習用教材(火薬し・炊飯土器)の製作・整備(延べ29回)	184人
	ボランティアガイド 連絡会等 対外交渉	ボランティアガイド連絡会(3日／6人) リレーブレーウォーク開催(7日／56人) ボランティア活動の講演(1回)	62人
4月19日・11月11日・ 2月8日	講演会・学習会等	企画展説明会(1回)・講話会受付(2回)	30人
延べ50日			453人





III. 唐古・鍵考古学ミュージアム

1. 企画展・ミニ展示

(1) 春季企画展「瓦に込めた願い～田原本の瓦づくりと民間信仰～」

内 容：田原本近在の近世瓦師名が残る鬼瓦等について、その作風と製作技法に注目し、近世手工業生産とその流通を探った。また、阪手カハウト遺跡の調査で出土した瓦製祠も関連する瓦細工として展示した。この企画展にあわせて「たわらもと2008発掘速報展」も開催し、特に成果のみられた秦楽寺遺跡第3次調査の玉作り関連遺物等を展示了。

期 間：4月19日（土）～5月25日（日）

入館者：704名（企画展のみ）

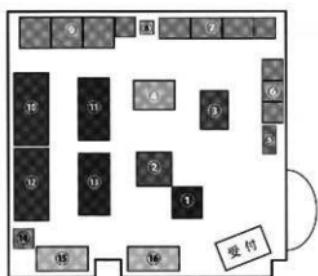
【展示構成と主要展示品】（展示総数141点）

- (I) 近世の鬼瓦と瓦師（ケース①～⑪）
 - 鬼瓦（津島神社・多神社・蓮光寺ほか）
 - 「興福寺」銘 平瓦（西氏所蔵）
- (II) 近世の民間信仰と瓦製祠（ケース⑫）
- 瓦製祠・灯明皿（阪手カハウト遺跡）
- (III) 速報展 I（ケース⑬）
- 土師器小皿・墨書き（寺内町遺跡）
- (IV) 速報展 II（ケース⑭⑮）
- 埴輪・土師器・須恵器（羽子田遺跡）
- (V) 速報展 III（ケース⑯）
- 玉類（製品・未成品）・砥石（秦楽寺遺跡）



春季企画展チラシ

【展示ケースの配置】



展示風景

【借用遺物】

寺社名簿	資料名	点数	所蔵者
津島神社 拝殿・社務所	鬼瓦・檼瓦	12点	津島神社
多神社 拝殿	鬼瓦	4点	多神社
鏡作神社 旧堂	鬼瓦・檼瓦	2点	鏡作神社
蓮光寺 本堂	鬼瓦・檼瓦・軒先端瓦・鳥糞瓦	8点	蓮光寺
栗田寺 楼門	檼瓦	2点	栗田寺
安樂寺 本堂	鬼瓦	2点	安樂寺
多觀音堂	鬼瓦	3点	多觀音堂
教安寺 本堂・普照寺 本堂・淨福寺 本堂・ 光源寺 本堂・佛光寺・念佛寺・中谷家	鬼瓦・軒先端瓦	15点	中谷義弘氏
興福寺 南斗堂	平瓦	1点	西 克義氏
15寺社等		49点	

【田原本町保管遺物】

遺跡名	遺物名	点数
企画展 寺内町遺跡 第10次調査	鬼瓦片(3)	3点
阪手カハウト遺跡 第1次調査	瓦製網(5)、灯明皿(13)、蛭獨立(1)	19点
寺内町遺跡 第10次調査	弥生土器(7)、石鏡(4)、石鑑(1)、石庖丁(1)、地鏡に使われた土師器(10)、土師器(6)、墨書き(3)、銅鏡(32)、铁鏡(6)、キセル(1)、毛抜き(1)、銅製鉢(1)、鉛玉(2)	75点
寺内町遺跡 第3次調査	滑石素材(一括)、碧玉素材(5)、蛇紋岩素材(1)、グリーンタフ素材(一括)、琥珀削片(一括)、ガラス削片(3)、勾玉未成品(2)、管下未成品(4)、有孔円板未成品(1)、臼玉未成品(38)、丸玉未成品(7)、砥石(6)	70点
法賀寺遺跡 第6次調査	不明鋼製品(1)、寛永通宝(8)	9点
羽子田遺跡 第31次調査	古式土師器(8)、須恵器(3)、円筒埴輪(1)	12点
5遺跡調査分	34製品	188点

【関連イベント】

イベント名	内 容	日時・場所	参加人数
講演会	小林 寧男氏(文部科学省選定 保存技術保持者) 「棟端陶瓦(鬼瓦)の起源」 中西 秀和氏(奈良県文化財保護指導委員) 「田原本町の近世鬼瓦について」	4月26日(土) 午後1時~4時 視聴覚室	60人
報告会	清水 緑哉・奥谷 知日朗(町文化財保存課技術) 「2007年度の調査成果~近世寺社を掘る・田原本の瓦作り~」	5月10日(土) 午後2時~4時 視聴覚室	25人



展示了風景



展示了ケース(7)



讲演会 (小林章男 氏)



讲演会 (中西秀和 氏)



报告会 (清水琢哉)



报告会 (奥谷知日朗)

(2) 秋季企画展「弥生デザイン～原始・古代の文様～」

内 容：さまざまな器物に描かれた模様（文様）は、装飾としての性格がみられるが、縄文時代から古墳時代にかけての文様には特別な意味がなかったのか、という視点で展示を試みた。なかでも弥生時代の流水文や鋸歯文、渦巻文、弧帶文等に注目し、土器の形と文様との関係、特殊な器物と文様の関係から特別な意味を探った。

期 間：10月18日（土）～11月23日（日）

入館者：671名（企画展のみ）

【展示構成と主要展示品】（展示総数109点）

(I) 縄文から弥生へ（ケース③）

縄文土器・石刀・銅剣柄・工字文の弥生土器

(II) 弥生時代前期の文様（ケース④）

彩文・木葉文・連続三角文

(III) 弥生時代中・後期の文様（ケース①②⑤⑥）

流水文・渦巻文・鋸歯文（土器・青銅器）

(IV) 弥生から古墳へ（ケース⑦⑧⑨）

弧帶文（長頸壺・特殊器台・弧帶文石・木製円板）

(V) 古墳時代の文様（ケース⑩⑪⑫⑬）

直張文・鋸歯文（埴輪・木製盾・木製柄）



秋季企画展チラシ

【展示ケースの配置】



展示風景



展示風景



展示ケース⑥



展示風景



展示ケース⑫



展示ケース⑬



講演会（辰巳和弘氏）

【借用遺物】

遺物名(遺物名・点数)	点数	所蔵者
櫻原遺跡(縄文土器片4)／竹内遺跡(石刀1)／唐古・鍛造跡(彩文壺片1) 大福遺跡(台付無頭壺1)／坪井遺跡(銅劍柄レプリカ1)／名柄遺跡(鋼鋸レプリカ1・多錐網文鏡レプリカ1)／椎向遺跡(銅鋸削耳片1・都月型特殊埴輪2)／中山大塚古墳(宮山型特殊器台1)／南郷遺跡(木製刀装具1) 河合大塚古墳(滑形埴輪1・家形埴輪柱部破片1)／旧柳本飛行場(滑形埴輪1)／牧郷赤井谷1号横穴(双形埴輪1)／巻向石塚古墳(弧带円板レプリカ1〔桜井市から借用〕)	20点	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館
坪井遺跡第5次調査(水差形土器1)／芝遺跡第21次調査(流水平窓坏1・流水文台付鉢1)／横田矢田野遺跡(滑石製鉗車1)／下永東城遺跡(滑石製鉗車1)／中山大塚古墳(都月型特殊埴輪11)／弁天塚古墳(宮山型特殊器台1・都月型特殊埴輪4)	21点	奈良県立橿原考古学研究所
大福遺跡(木製箱2)／椎向遺跡(弧文石1)／小立古墳(木製盾1)	4点	桜井市教育委員会
21遺跡(26製品)	45点	3機関

【田原本町保管遺物】

遺跡名等	遺物名	点数
唐古・鍛造跡 第13次調査他	彩文土器(4)、木葉文壺蓋(6)、方両文鉢・壺(2)、三角刺突文壺(1)、流水文土器(広口壺1・水差形土器2・把手付鉢1・壺片5)、渦巻文土器(古墳壺1・壺2・壺片他15)、鏡面文土器(器台片3・萬葉脚部2・台付鉢1・壺蓋1・壺片2)、弦帶文土器(長頸壺3・壺片3・器台片1・異形萬葉1)、眉形埴輪(1)	58点
保津・古吉遺跡 第14次調査	眉形埴輪(1)	1点
小阪里中遺跡(1号墳) 第1次調査	眉形埴輪(3)	3点
芝遺跡	建物絵墨土器(レプリカ)(1)	1点
参考資料	スイジ貝(1)	1点
4遺跡		64点

【関連イベント】

イベント名	内 容	日時	場所	参加人数
講演会	辰巳 和弘氏(同志社大学教授) 「“かたち”の“こころ”」	10月26日(日) 午後2時~4時	視聽覚室	43名

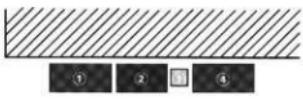
(3) ミニ展示

ア. 夏季ミニ展示

発掘調査をおこなった町内の遺跡や出土品などを紹介する「田原本の遺跡4 唐古・鍵遺跡 古墳と中世居館」展を7月26日(土)～8月31日(日)まで開催した。

【展示の構成と内容】(展示期間:32日間／展示点数35点)

- (I) 古墳時代の唐古・鍵遺跡(ケース①②③)
須恵器・埴輪・田下駄・井戸に埋納された馬骨
- (II) 歴史時代の唐古・鍵遺跡(ケース④)
須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・金属器



イ. 冬季ミニ展示

冬季ミニ展示は、当教育委員会が保管所有する遺物を紹介する展示で、今回は弥生時代から明治時代までの石の道具を焦点をあてる「ミュージアムの収蔵品4 石の道具」展を1月31日(土)～3月1日(日)まで開催した。

【展示の構成と内容】(展示期間:26日間／展示点数198点)

- (I) 弥生時代の石器(ケース①②)
打製石器・磨製石器・石材
- (II) 古墳時代の玉作り(ケース②)
玉未成品・砥石・素材
- (III) 中・近世の石製品(ケース③④)
石硯・石板・火打石・石造物



2. 入館者・ホームページ

(1) 入館者数

平成20年度の入館者数は、9,217人である。前年度の入館者を比べると、本年度の入館者は約26%減少した。この主な原因は、平成19年度に埋蔵文化財保存活用整備事業として開催した秋季企画展の無料入館者（その他）の差である。したがって、有料入館者においては、それほどの差は出でていないので、常設展の動向としては平年並みとみることができる。

【年度別入館者推移】

年 度	開館 日数	有料入館者		無料入館者			合 計
		一 般	高・大學生	15歳以下	身障者	招待者	
16年度	103	1,744	131	1,345	42	251	1,083 4,596
17年度	306	4,988	401	3,060	174	357	3,040 12,020
18年度	306	2,962	911	3,138	105	233	3,879 11,228
19年度	306	3,760	483	2,933	102	186	4,963 12,427
20年度	307	3,473	567	2,790	92	216	2,079 9,217
累 計	1,328	16,927	2,493	13,266	515	1,243	15,044 49,488

*16年度は、11月24日から3月31日まで延べ103日間の入館者数

【企画展 入館者数】

	開館 日数	有料入館者		無料入館者			合 計	
		一 般	高・大學生	15歳以下	身障者	招待者		
17年度	春季	32	733 (211)	43 (0)	222 (0)	15	77	298 1,388 (211)
	秋季	32	349 (25)	31 (0)	101 (0)	5	42	449 980 (25)
18年度	春季	32	340 (52)	65 (41)	205 (32)	10	30	140 790 (125)
	秋季	32	0 (0)	0 (0)	217 (0)	0	0	1,628 1,845 (0)
19年度	春季	32	332 (54)	21 (0)	331 (223)	9	15	140 848 (277)
	秋季	32	0 (0)	0 (0)	169 (0)	0	47	2,373 2,589 (0)
20年度	春季	32	303 (28)	15 (0)	163 (63)	7	38	178 704 (91)
	秋季	32	231 (0)	44 (0)	93 (0)	5	33	265 671 (0)
合 計		256	1,956 (370)	219 (41)	1,504 (318)	51	282	5,768 9,815 (729)

*1 () は団体入館者の人数（内数）、18年度・19年度の秋季企画展は無料の為、団体入館数はカウントしていない。

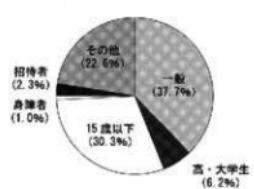
*2 本表「無料入館者 その他」は、「親子無料入館日」「関西文化の日」の無料入館者を含む。また、18年度・19年度の秋季企画展は、文化庁の「埋蔵文化財保存活用整備事業」の為、無料とし、本項に含めた。

【月別入館者数】

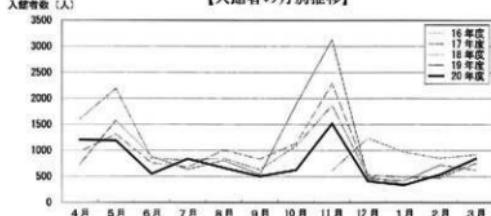
月	開館 日数	有料入館者		無料入館者				合計
		一般	高・大学生	15歳以下	身障者	招待者	その他	
4月	26	481 (156)	28 (0)	427 (164)	11	29	224	1,200 (320)
5月	27	551 (167)	19 (0)	338 (131)	10	35	238	1,191 (298)
6月	25	209 (95)	17 (0)	179 (0)	14	11	125	555 (95)
7月	27	191 (76)	197 (140)	314 (64)	2	13	122	839 (280)
8月	27	143 (0)	72 (59)	325 (0)	5	12	108	665 (59)
9月	25	209 (99)	8 (0)	169 (0)	5	8	106	505 (99)
10月	27	268 (41)	7 (0)	158 (0)	9	33	154	629 (41)
11月	27	462 (48)	113 (0)	283 (0)	17	45	598	1,518 (48)
12月	23	193 (90)	19 (0)	109 (0)	3	8	78	410 (90)
1月	23	96 (0)	8 (0)	123 (0)	6	5	94	332 (0)
2月	24	227 (109)	41 (26)	137 (0)	7	5	117	534 (135)
3月	26	443 (267)	38 (28)	228 (0)	3	12	115	839 (295)
合計	307	3,473 (1,148)	567 (253)	2,790 (359)	92	216	2,079	9,217 (1,760)

※ () は団体入館者の人数(内数)

【入館者の内訳】



【入館者の月別推移】



※ その他は、研修での利用(減免)・ボランティア研修などの来館者。

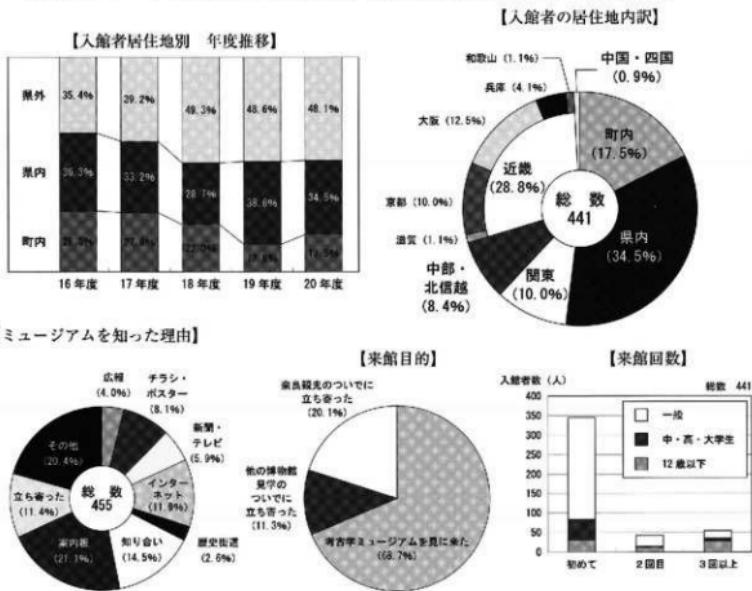
また、全体に対する団体の割合は、19%で増加傾向である。特に一般の有料入館者での団体の割合が33%を占めるようになってきている点は、団体での見学コースとしてミュージアムが組み入れられてきていることを表していると考えられる。

入館者の月別推移は、開館2年目以降、同様な傾向で企画展を開催する5月と11月の2つの月にピークがみられ、逆に9月と12~2月にかけて落ち込む傾向が読み取れる。

無料入館日の入館者は、5月6日(火・祝)のこどもの日(親子・保護者を対象)47名、関西文化の日の11月15日(土)320名・16日(日)192名の合計559名であった。

(2) 入館者アンケート

入館者アンケート（常設展示）を実施した。回答総数735件、回答率5～8%である。



(3) 視察・研修・学校等からの来館

平成20年度は、下記のとおり視察・研修7件133名、学校の利用5校542名、海外から研究者11名の来館があった。

視察・研修	櫻原市教育委員会（4月12日／3名）・奈良県市町村文化財保存整備協議会（5月31日／20名）和歌山市公民館（7月6日／12名）・文化庁（9月4日／1名）・奈良県青少年指導員協会（1月27日／20名）・守山市埋蔵文化財センター（2月6日／46名）・奈良県婦人教育推進会（2月8日／31名）
学校利用	北小学校6年生（4月18日／41名）・田原本小学校6年生（4月25日／130名）・平野小学校6年生（5月20日／66名）・平野小学校3年生（7月1日／66名）・奈良大学通信教育（7月20日／126名、8月30日／59名、2月14日／26名、3月14日／28名）
海外研究者	ベトナム考古学研究所（6月27日／3名）・韓国昌原研究所（8月27日／3名）・韓国ウリ文化財研究所（12月4日／2名）・国立光州博物館（2月12日／3名）

(4) ホームページ

収蔵資料検索では、新たに「町内の遺跡と文化財」として第3室展示品を検索できるようにした。平成20年度のアクセス件数は9,391件で、前年度より9%減少した。

【ホームページのアクセス数】

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度
アクセス数	2,518	8,324	8,183	10,291	9,391
累計	2,518	10,842	19,025	29,316	38,707

3. ボランティアガイド

(1) ボランティアガイドの実績

ミュージアムの展示品解説ボランティアは、開館以来実施している。ガイドは年度単位とし、継続更新は可としている。平成20年度のガイドの登録は40名で、20年度の新規登録者は3名である。基本的に月2回の午前10時から午後4時（冬季の12月～2月は午前11時から午後3時）までとし、常駐2人体制で実施した。また、団体客等多数の来館の場合に備えて、応援ガイド体制を作りその時間帯のみ臨時に応対している。このような体制で、下表実績に示すとおり約4割の来館者に対応した。ガイドの研修は、6月7日に「唐古・鍵遺跡出土の石器について」を実施した。

【展示ボランティアガイド実績】

月	開館日数	稼動人数	ガイド人數 *1	入館者数 (常設展のみ)
4月	26日	60人	489人	948人
5月	27日	50人	419人	739人
6月	25日	45人	199人	555人
7月	27日	52人	416人	839人
8月	27日	54人	206人	665人
9月	25日	50人	220人	505人
10月	27日	58人	183人	480人
11月	27日	55人	301人	996人
12月	23日	44人	192人	410人
1月	23日	46人	90人	332人
2月	24日	49人	239人	534人
3月	26日	55人	475人	475人
合計	307日	618人	3,429人 (46%) *2	7,478人

※1 ガイド人數は概数

※2 ガイド数／入館者の割合



IV. 資料の報告

唐古・鍵遺跡における石器製作残滓の様相

同志社大学大学院文学研究科博士課程（後期課程）

日本学術振興会特別研究員DC

上峯 篤史

1. はじめに

唐古・鍵遺跡は、弥生時代中期を中心とするサスカイト製石器の生産と流通において、重要な役割を果たした遺跡として知られている。事実、本遺跡からは多量のサスカイト製石器が出土しており、これまで実測図が提示されている¹⁾。その一方、こうしたサスカイト製石器の製作に伴って生じた残滓である剝片や石核も、多量に出土している。こうした資料については、第20次調査の石核のはかは²⁾、詳細に資料提示されたことはない。また、弥生時代の石器研究を見渡してみても、このような製作残滓の類には、注意が払われることが少ない。

「唐古・鍵遺跡 I」³⁾においては、定型的なサスカイト製石器について、観察所見の詳述と実測図の提示を果たした。しかしながら、石核などの製作残滓については、時間の都合から、概略程度の記載にとどまった。入稿後、改めて石核やサスカイト原石など、石器生産に関わる遺物について観察・実測する機会をもった。本稿では、これらの遺物について述べ、旧稿の欠を補うとともに、当該分野の基礎資料の蓄積を図る。

2. サスカイト製石核の分布

『唐古・鍵遺跡 I』では、第61次・65次・69次・79次・80次・84次・89次・93次・98次調査が報告されており、第61次・65次・69次調査地がいわゆる「南地区」、第79次・80次・84次・89次・93次調査地が「西地区」、第98次調査地が「中央区」に相当する⁴⁾。上記の調査地においては、第1表の上段に示したように、計116点の石核の出土を確認している。調査地ごとの内訳を見ると、第79次・84次・93次・98次調査地のように、西地区や中央区では、石核が比較的多いことがわかる（第1表－石核の出土点数／調査面積×100）。とりわけ第98次調査地における石核の出土量は際立って多い。また、サスカイト製石器（石剣・中形尖頭器・石錐・石錐・石小刀・石匙・スクレイバー・楔形石器）

第1表 唐古・鍵遺跡における石核の出土傾向

地区	南地区			東環濠		西地区					中央区 (98次)	平均値 (中央値)
	61次	65次	69次	79次	80次	84次	89次	93次	98次	98次		
石核の出土点数	4	4	1	0	0	17	6	30	8	14	32	10.55 (6.00)
石核の出土点数／ 調査面積×100	1.20 (4/333)	0.73 (4/545)	0.11 (1/919)	0 (0/320)	0 (0/225)	6.30 (17/270)	6.00 (6/100)	7.08 (30/424)	1.60 (2/300)	2.92 (14/480)	13.09 (32/245)	3.55 (1.60)
石核の出土点数	41.50 (066/4)	68.25 (273/4)	317.00 (317/1)	-	-	7.24 (129/17)	16.50 (99/6)	5.70 (171/36)	15.75 (126/8)	12.14 (170/14)	5.28 (169/32)	54.37 (15.75)
サスカイト製石器 の総重量(g)／ 調査面積	76.8 (25570/333)	47.0 (25693/545)	46.2 (40482/919)	1.6 (516/320)	2.6 (574/225)	81.9 (2215/270)	180.0 (17998/100)	74.7 (31689/424)	36.1 (18074/500)	112.3 (53827/980)	151.2 (37054/245)	73.7 (74.7)

* 太字は平均値以上の値

の総数と、石核の点数を比較してみると（第1表－石器の出土点数／石核の出土点数）、南地区では、サヌカイト製石器の数量が格段に多いことがわかる。その一方、西地区や中央区では、石核の数量が相対的に多く、サヌカイト製石器の生産は、西地区・中央区を中心におこなわれたことが推定できる。各調査地で出土した剥片の正確な点数は不明であるが、出土したサヌカイト製造物の大多数が剥片であることを鑑み、第1表には、参考までに「サヌカイト製造物の重量(g)／調査面積」の値を示している。これについても、西地区や中央区が相対的に高い値を示し、剥片の出土量がこれらの地区で際立っている可能性が高いとみられる。これらの地区では、サヌカイト原石の集積遺構（第37次調査地）⁵⁾や、多量の微細剝片を埋棄した土坑（第37次調査地、第93次調査地）⁶⁾が知られており、以上の想定と矛盾しない。

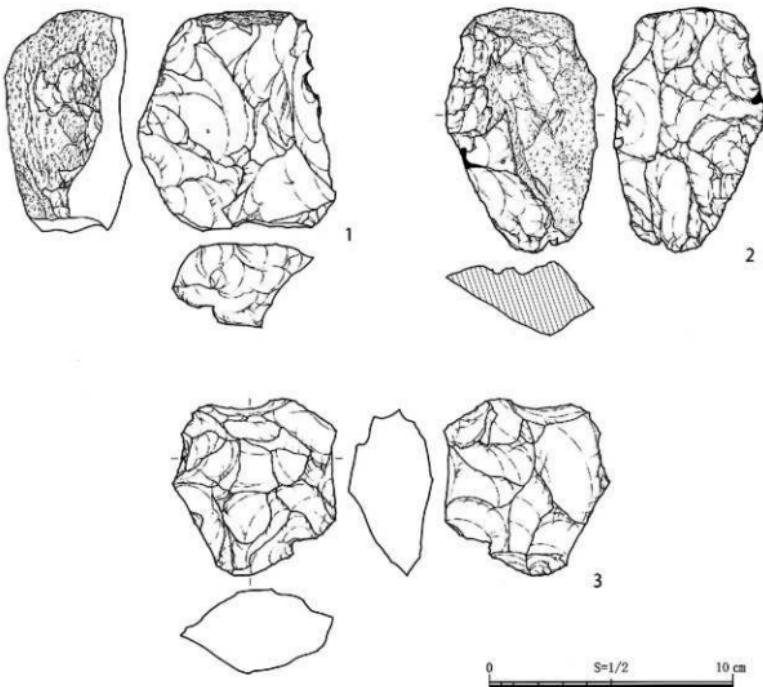
3. 石核（第1～4図）

次に、実測図を提示した資料について、説明を加えていく。石核は、剥片が剥離された後の残核であり、本稿では、14点図示している⁷⁾⁸⁾。

1には、海綿状の自然面をもつ円盤が用いられている。ポジティブな剝離面がのこされており、石理に沿って原石を分割するようにして割りとられた、厚手の剥片が素材となっている。石核素材の生産は、自然面を打面としている。打点付近には階段状の剝離痕が密集しており、石核素材の生産に伴う打撃痕と思われる。剝離開始部にはコーン（打撃錐）が複数認められ、剝離に際して大きな力が加わったことが推察できる。石核素材の生産に後続する、石器素材剥片の剝離作業に伴う剝離痕は、こうしたポジティブな剝離面を作業面としている。また、作業面をとり囲む自然面が打面となっており、おむね時計回りに剝離作業が進行している。こうした剝離は、石理に並行もしくはやや斜交する角度で施されている。図の左側面には、階段状の剝離痕が観察できるほか、微細な階段状剝離痕と敲打痕が密集し、白色を呈している部分がある。この痕跡は、かつて「（打撃）潰痕」⁹⁾と呼ばれた打撃痕と思われ、頻繁に打撃をうけたことを示しているのだろう。図の下面には、乳白色の夾杂物を中心として生じたポット・リッド状の剝離痕が観察でき、本資料が熱をうけていることが明白である。また、すべての剝離痕に明瞭な光沢が認められるが、この点も被熱の証左と考えられる。

2は、円盤が素材となっている。自然面における海綿状のクレーターは、他の資料ほど明瞭ではなく、自然面の稜線上には、微細な爪状の打撃痕が密集してなめらかになっている。図の表面には、弥生時代の剝離面とは風化度を異にする、灰白色の剝離痕も数枚認められる。図の裏面左上に、わずかにポジティブな剝離面がのこされており、剥片素材の石核であることがわかる。コーンの発達が顕著で、打面となった自然面には、 $1.0 \times 0.6\text{cm}$ の範囲に「（打撃）潰痕」がある。石核素材となった剥片は、石理に直交して剝離されたようである。後続する剝離作業は、石核素材生産時の剝離面を作業面としている。図の裏面左側縁から生じている剝離面は、石核素材の背面を覆う自然面が打面となっている。一方、裏面右側縁は両面剝離状となっているが、切り合い関係の観察では、おむね表面側にのこされた剝離痕が先行しており、裏面の剝離痕の打面を提供している。また、裏面左側縁の剝離痕は、右側縁のものに先行するようである。

3は、すべての剝離面に、わずかに光沢が観察される。図の裏面右側にポジティブな剝離面が認



第1図 唐古・難遺跡の石核（1）

第2表 石核の観察表（1）

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/土色	計測値 (cm)			重量 (g)	備考	共存時期
					最大長	最大幅	最大厚			
1	石核	61次	SD-151A	第8(下)層	9.22	8.01	5.13	425.0	剥片素材	II - 3
2	石核	84次	SD-101S	第1層	10.01	6.29	3.02	177.8	剥片素材	古墳時代
3	石核	79次	SD-101C	第13(下)層	7.05	7.00	3.65	178.4		III - 2(下層III - 1)

められ、剥片素材の石核とわかる。剥離作業は、打面と作業面を随時入れかえながら、交互剥離状に進められている。

4は、海绵状の自然面をもつ凹凸が素材となっている。石核の両面にポジティブな剥離面が認められることから、剥片素材の石核から得られた剥片が、さらに石核として利用されることになる。自然面の残存状況をみる限り、本資料の素材となった剥片の生産、及びそれに先行する剥離は、用いられた原石の作業面全体に及ぶものであったと思われる。すなわち、原石を3枚以上に分割するような剥離作業が想定されるところである。本資料の主な作業面となっているのは、裏面として図示したポジティブな剥離面であり、求心状の剥離作業が進められたようである。表面に対しても剥離が施されており、それが裏面の剥離痕の打面となっている。石核の外周にはおびただしい量の

階段状剥離痕と敲打痕がのこされており、本資料が消費限界に達している様がうかがえる。また、表面中央のポジティブな剥離面上には、 $2.9 \times 3.1\text{cm}$ の範囲にわたって、打撃痕がのこされている。これらは周囲の剥離痕に後続するもので、石核の分割を試みた際の「剥離失敗打撃痕」¹⁰⁾の可能性もある。

5には、海綿状の自然面をもつ円錐形が用いられている。ポジティブな剥離面がのこされていることから、剥片が素材となっていることがわかる。石核素材は自然面を打面とし、右理に沿って剥離されている。石器素材剥片の剥離作業は、打面と作業面を随時入れかえながら進められているようである。

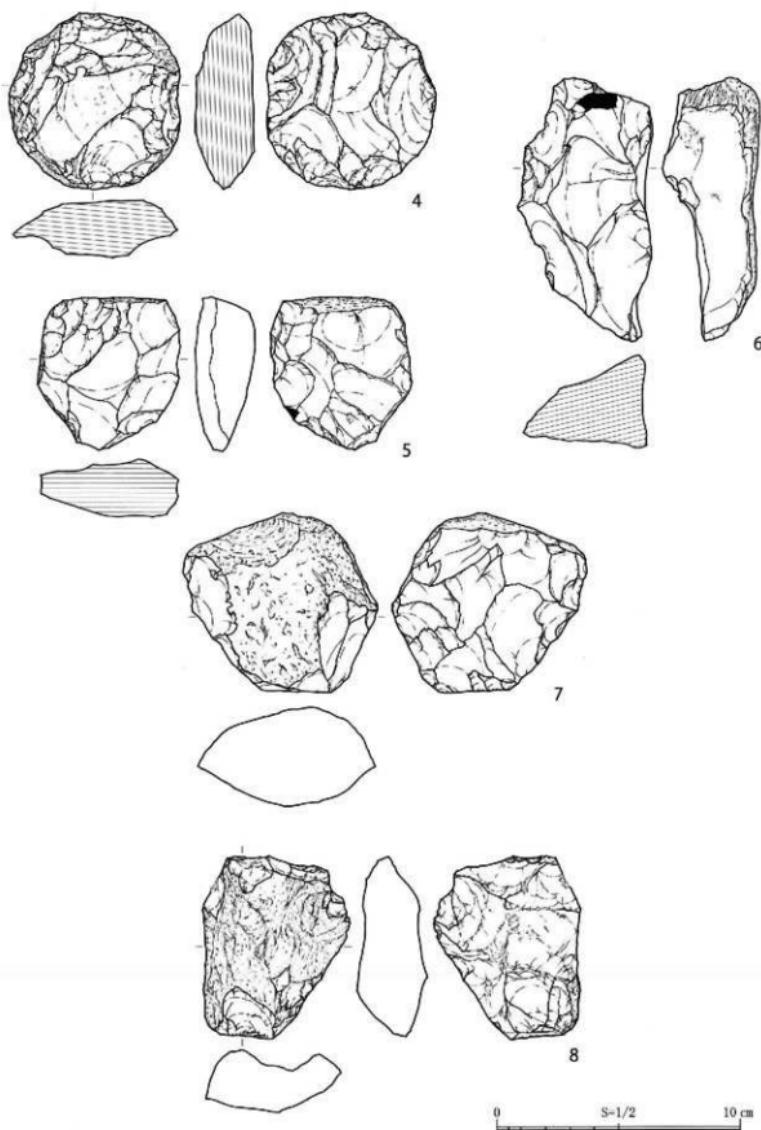
6は、海綿状の自然面をもつ亜角錐形が素材となっている。すべての剥離面に、わずかに光沢が観察される。また剥離痕の稜線はわずかに磨耗して灰白色を呈しており、何らかの堆積作用を反映していると思われる。石核の作業面には、先行するポジティブな剥離面がわずかにのこされており、剥片が石核素材となっていることがわかる。右器素材剥片の剥離にあたっては、石核素材生産時のポジティブな剥離面が作業面に、石核素材の側面の自然面が打面となり、求心状に剥離作業が進行している。石核素材の生産が右理に沿っていることもあり、右器素材剥片も右理に沿って剥離されている。右側縁には右核を断ち切るような剥離痕があり、右器素材剥片は剥離する際の打面となっている。この剥離痕がのこされたタイミングを断定することはできないが、石核素材生産時の剥離面のリングの回り方からすると、この剥離痕が右核素材生産に先行する可能性は低い。

7は、海綿状の自然面をもつ円錐形が素材となっている。剥片素材の右核で、素材剥片生産時のポジティブな剥離面が明瞭に観察できる。自然面を打面として剥離されており、剥離角は120度程度である。打点付近には、 $2.1 \times 0.8\text{cm}$ にわたって、「(打撃) 潰痕」がみられる。石核素材生産に伴うコーンの発達も顕著である。こうした石核素材生産時の剥離面を打面とし、石核素材の背面の自然面をとり込むように、剥離痕がのこされている。統いて、これらの剥離痕を打面に、石核素材生産時の剥離面を作業面として、いわゆる求心状剥離の要領で剥離作業が進められている。

8は、角錐を素材としている。自然面の特徴は2(第1図)にちかいが、爪状の衝撃痕はまったく認められない。裏面にも自然面が及んでおり、右器素材剥片の生産に先立ち、右核素材の生産がおこなわれた可能性は低い。おそらく扁平な小核を素材として、剥片生産が試みられたものと思われる。剥離痕は右核の両面に認められる。切り合い関係は一定しないが、右器の素材となりうる大きさの剥片は、表面側を作業面とした剥離作業では得られていないようである。また、裏面の中央付近には白色の擦痕状の痕跡が顕著に認められる。これらは剥離痕の稜線上、及びリングの一部など、剥離面が隆起している部分に現れていることから、堆積作用に起因するものと考えられる。塙田良道氏によって、「後の微細剥離痕と線状痕」¹¹⁾として記載された痕跡と思われる。

第3表 石核の観察表(2)

遺物番号	器種	測定 次数	遺物名	層位/土色	計測値(cm)			重量 (g)	備考	其律時期
					最大長	最大幅	最大厚			
4	右核	98次	SD-102	第2層	7.21	7.18	2.82	171.9	剥片素材	Ⅲ-2
5	右核	98次	昭和褐色砂質土		7.12	5.75	2.32	98.8	剥片素材	弥生(中頃)
6	右核	93次	SD-2067	第1層	10.70	5.63	3.67	205.2	剥片素材	中世
7	右核	98次	SX-101	第1層	8.08	7.07	4.50	238.7	剥片素材	庄内
8	右核	93次	SD-50N	第4層	7.93	5.85	2.83	146.6		中世



第2図 唐古・鍵遺跡の石核（2）

9は、海綿状の自然面をもつ円盤が素材となっている。すべての剥離面に、わずかに光沢が観察される。分割標本の剥片を素材とする石核で、石核素材は石理に斜交する角度で剥離されている。石器素材剥片の剥離にあたっては、石核素材生産時のポジティブな剥離面が作業面に、石核素材の末端部の自然面が打面となっている。こされた剥離痕から推定すると、剥離された剥片は最大でも、最大長2cm程度、最大幅5cm程度、最大厚1cm弱の大きさと思われる。

10は、海綿状の自然面をもつ円盤が素材となっている。剥片素材の石核で、石核素材生産時のポジティブな剥離面がこされている。石核素材の生産は石理に沿っておこなわれたようであるが、後続する剥離痕によって、既に打面は失われている。また石核素材の背面にあたる自然面上には、「(打撃) 潰痕」の密集する箇所があり、石核素材生産時の「剥離失敗打撃痕」の可能性がある。後続する剥離作業において、石核素材生産時の剥離面を作業面に、作業面外周の自然面、及び石核右側面の剥離痕が打面となっている。図の裏面下の剥離痕は、ボット・リッド状になっており、本資料が熱をうけていることを示している。すべての剥離面が光沢をもっている点は、同じく被熱が確実視される1(第1図)と共通している。

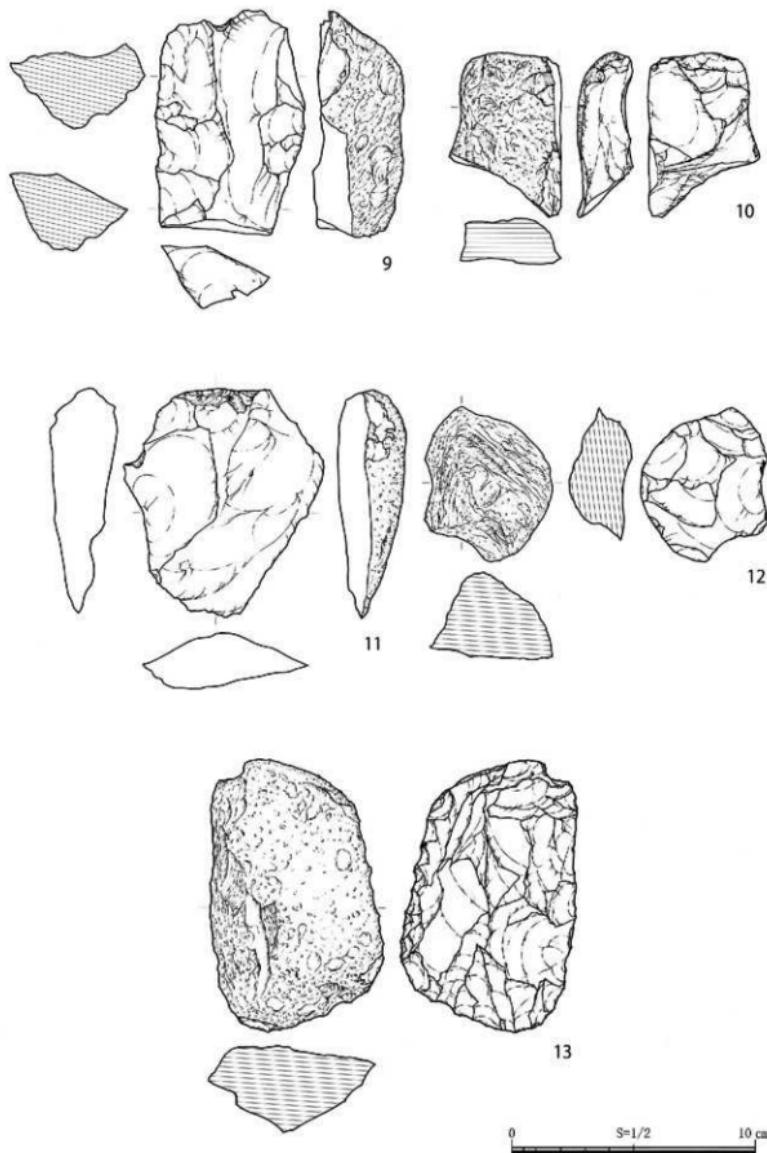
11は、海綿状の自然面をもつ円盤が素材となっている。剥片素材の石核であり、石核素材となつた剥片の背面は、自然面に覆われている。石核素材生産時の打点と思われる部分には、 $1.57 \times 1.3\text{cm}$ の範囲にわたって「(打撃) 潰痕」がある。打点直下にはコーンが発達している。石核素材は、自然面を打面とし、120度程度の剥離角で生産されている。石器素材剥片の剥離にあたっては、石核素材生産時のポジティブな剥離面が作業面に、石核素材の側面の自然面が打面となっている。こされた剥離痕から推定すると、剥離された剥片は最大長4cm程度、最大幅5cm程度、最大厚1cm弱の大きさと思われる。また、石核素材の右側縁には、石核素材生産時の剥離面を打面とする小剥離痕が2枚確認できる。

12は、海綿状の自然面をもつ円盤が用いられている。こされている剥離面はいずれもネガティブな剥離痕であり、石核素材を断定することは難しい。ただし切り合い関係で最も先行する剥離痕は、作業面全体に及ぶ大きな剥離痕であり、この剥離痕を石核素材生産時のものとみることもできよう。その場合、石核素材は石理に斜交する角度で生産されることになる。石器素材剥片の生産は、作業面をとり回す自然面を打面とし、求心状剥離の要領で進められている。作業面は1面に固定されており、石理に斜交もしくは直交する角度で剥離作業が進行している。

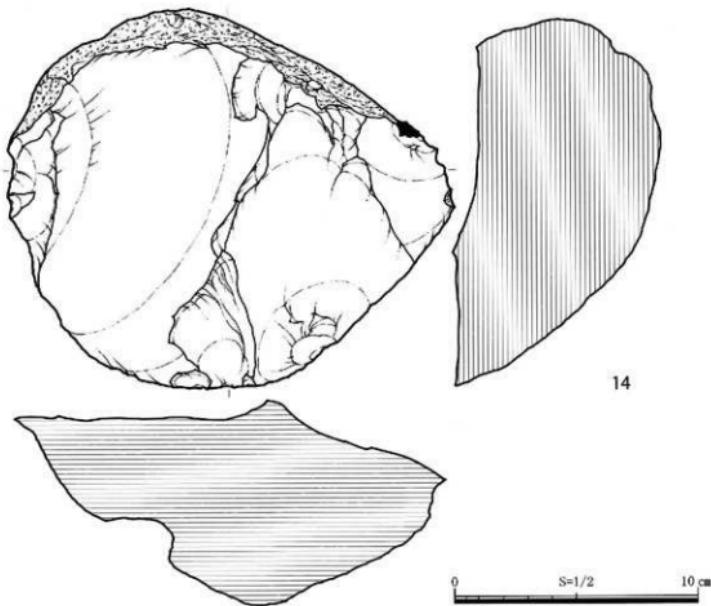
13は、海綿状の自然面をもつ円盤が素材となっている。自然面の特徴が11と酷似している。裏面左下にポジティブな剥離面がこされており、剥片を素材としていることがわかる。石核素材は、石理に沿って原石を分割するように生産されたようで、表面は自然面に覆われている。推定される

第4表 石核の観察表(3)

遺物番号	器種	調査 次数	遺構名	層位/上色	計測値(cm)			重量 (g)	備考	共伴時期
					最大長	最大幅	最大厚			
9	石核	98次	SD-101C	第13層	9.34	5.95	3.43	214.2	剥片素材	II-3~III-1
10	石核	98次	SK-103	第4層	7.02	5.55	1.80	70.1	剥片素材	IV-1
11	石核	98次	SD-101	第1層	9.31	7.27	2.78	179.2	剥片素材	弥生後期初頭
12	石核	98次	...	暗褐色砂質土	6.22	5.51	3.49	108.3	...	中世
13	石核	98次	SD-101	第1(下)層	10.91	6.72	3.30	302.0	剥片素材	古墳後期(下層Ⅱ)



第3図 唐古・健遺跡の石核（3）



第4図 唐古・鎌遺跡の石核（4）

第5表 石核の観察表（4）

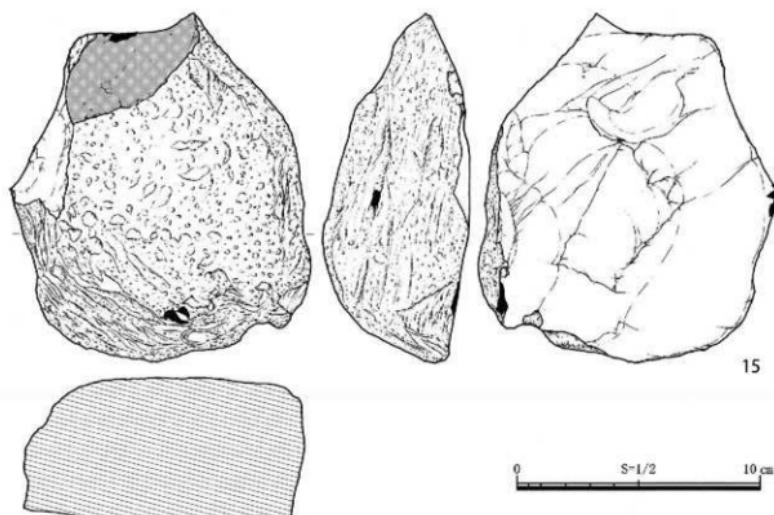
遺物番号	器種	調査 次數	遺構名	層位/土色	計測値(cm)			重量 (g)	術考	共伴時間
					最大長	最大幅	最大厚			
14	石核	98次	SD-101B	第5層	18.08	15.31	9.00	2370.0		III-4

石核素材の形状と、本資料の現在の形状には大きな隔たりがあり、石器素材剥片の剝離作業が随分進行しているようである。こうした剝離作業は、作業面となっている石核素材生産時の剝離面をとり囲む自然面上を、隨時打点を移動させながら進められている。

14は、海綿状の自然面をもつ円錐が素材となっている。今回報告する調査区から出土したサヌカイト製造物のなかでは、最大のものである。剝離面は何れもネガティブか平坦なもので、石核素材を生産する工程が存在したかどうかは判断できない。現在の形態から考えると、分割錐状のものが素材として用いられたことも予想される。石器素材剥片の剝離作業にあたっては、作業面を固定し、その周囲の自然面上を打点が隨時移動させながら進められている。のこされた剝離痕からは、石器素材として充分な大きさの剥片が得られたと思われる。こうした一連の剝離作業は、石理に沿っておこなわれている。

4. 剥片（第5図）

15は分割錐状の剥片である。サヌカイト原石が大きく分割されたもので、背面は海綿状の自然面



第5図 唐古・鍵遺跡の剝片

第6表 剥片の観察表

遺物番号	器種	測定次数	測定名	部位/土色	計測値(cm)			重量(g)	備考	共伴時期
					最大長	最大幅	最大厚			
15	剥片	93次	SD-2062	第1層	13.25	13.15	5.80	2550.0	分割縫	中世

に覆われている。背面には、空孔が発達する灰白色の剝離痕があり（実測図のトーン部）、明らかに弥生時代に先行する剝離痕と思われる。背面には、切り合い関係上、腹面に後続する剝離痕があるが、剝離面の様子からは、腹面と同時に生じた剝離痕と思われる。原石の分割は自然面を打面とし、石理に沿っておこなわれており、剝離角は100度程度である。本資料は、そのまま石器素材として用いるには不適と思われ、石核素材として用意されたものと考えられる。

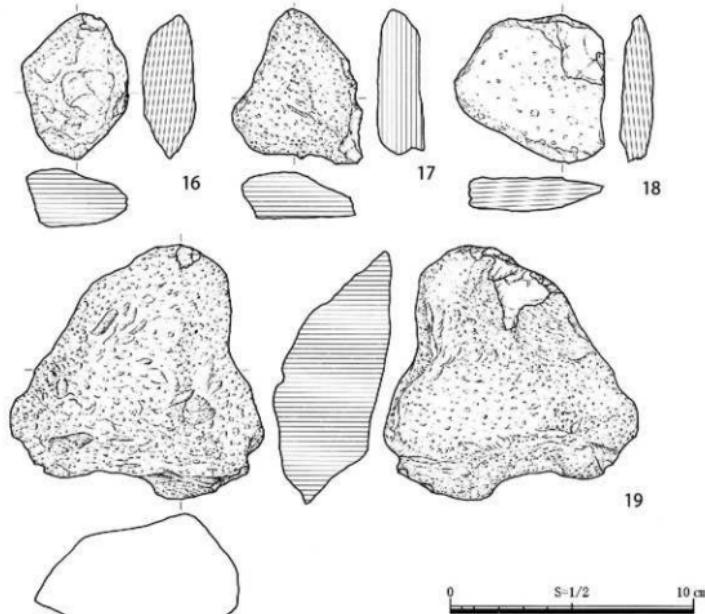
5. サスカイト原石（第6図）

本稿でとりあげる調査地では、4点のサスカイト原石が出土している。

16は、白色の風化皮膜からなる自然面を見せている。図の右側面には、階段状の剝離痕が発達する部分があり、本資料に対して、何度か打撃が試みられたことがわかる。また、図の上部から剝離痕が生じている³²⁾。

17は、海綿状のクレーターの発達した自然面を見せており、扁平なサスカイト原石である。また図の右側縁には、風化の進行した剝離痕が3枚程度確認できる。これらは明らかに弥生時代よりも先行する時期にのこされたもので、本資料の来歴を考えるうえで興味深い。本資料は、本稿でとりあげる調査地のサスカイト製造物で唯一、無加工の原石といえるものである。

18は、自然面に海綿状のクレーターが見られる。2と同様、扁平である。図の表面には、石理に



第6図 唐古・鎌遺跡のサスカイト原石

第7表 サスカイト原石の観察表

遺物番号	器種	測定 次数	遺構名	層位/土色	計測値(cm)			重量 (g)	備考	共存時期
					最大長	最大幅	最大厚			
16	原石	69次	SK-1130	第5層	5.91	4.37	2.42	71.2		Ⅲ-3
17	原石	69次	SD-1104	第3層	6.22	5.29	1.90	65.7		Ⅵ
18	原石	69次	SD-1101	第1層	6.10	6.12	1.60	71.8		Ⅵ-3
19	原石	93次	SX-2101	第1層	10.30	10.30	4.30	480.5		Ⅵ-4・布留

ほぼ並行する角度で剝離痕がのこされている。

19は、自然面には海綿状のクレーターが発達している。石理が水平になるようにすえた場合、縦長の形状となるものである。図の上縁や右下縁には、剝離痕や敲打痕がのこされており、剝片剝離が試みられたことがうかがえる。また、表面の自然面の隆起部には、いわゆる「(打撃) 潰痕」の発達する部分がある。おそらく、石理に沿って原石を分割しようとした際の「剝離失敗打撃痕」と思われる。

6. おわりに

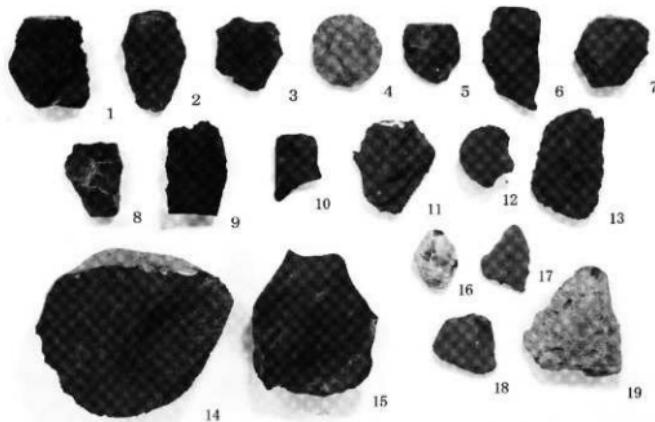
以上の石核の観察からは、剝片生産の方法として以下の4種類が想定できる。すなわち、①作業面は固定的で、打点が作業面の周囲を弧状に移動しながら、求心剝離の要領で剝離作業が進められ

るもの（第1図の1、第3図の11～13、第4図の14）、②石核の主な作業面側からの打撃によって作出された剥離痕を打面とし、剥離作業が進められるもの（第2図の4・7～8）、③石核の主な作業面側からの打撃によって石核を分割、あるいは厚手の剥片が割ぎとられ、生じた剥離痕を打面として剥離作業が進められるもの（第2図の6、第3図の10）、④打面と作業面を随時入れかえ、内面剥離の要領で石核の両面から剥片剥離をおこなうもの（第3図の3、第2図の5）である。また、剥片素材の石核が多いことからは、石器素材剥片の剥離に先立って、石核の素材を用意する工程を想定することができる。

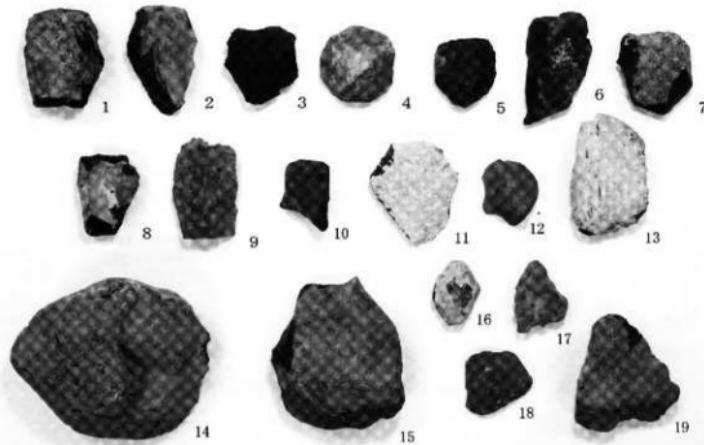
当該期の剥片剥離技術を論じた研究は多くはなく、本遺跡における剥片剥離技術を総括的に論じるためには、詳細な検討作業を必要とする。本稿では今後の研究の基礎となる資料の提示にとどめ、剥片剥離技術の問題については、別稿にて論じることとした。

註

- 1) a.藤岡康二郎・小林行雄1976「第7章 石器類」「大和古跡発掘の研究」京都帝國大学文学部考古学研究報告 第16冊 京都帝國大学 pp.183-207。
b.藤田三郎1983「(4). 鋒形土製品、鞘入り石剣、武器形石器」「田原本町埋蔵文化財調査概要1 - 昭和57年度古・健遺跡第13・14・15次発掘調査概要-」田原本町教育委員会 pp.24-26。
- c.塙田良道1984「(3). 石器」「田原本町埋蔵文化財調査概要2 - 昭和58年度古・健遺跡第16・18・19次発掘調査概要 黒田大塚古墳第1次発掘調査概報」「田原本町教育委員会 pp.14-19。
- d.塙田良道1986「(3). 石器」「田原本町埋蔵文化財調査概要3 - 昭和59年度古・健遺跡第20次発掘調査概要 黒田大塚古墳第2次発掘調査概報」「田原本町教育委員会 pp.72-86。
- 2) 塙田良道1986「(3). 石器」「田原本町埋蔵文化財調査概要3 - 昭和59年度古・健遺跡第20次発掘調査概要 黒田大塚古墳第2次発掘調査概報」「田原本町教育委員会 pp.72-86。
- 3) 田原本町教育委員会2009「唐古・健遺跡I -範囲確認調査-」田原本町文化財調査報告書第5集。
- 4) 東環濠に属する第75・78次調査地からは、石核が出士していない。
- 5) 田原本町教育委員会1990「田原本町埋蔵文化財調査年報1 1988・1989年度」。
- 6) 森木香1994「拾てられた剥片」「考古学における計量分析-計量考古学への道(IV)-」帝塚山考古学研究所 pp.59-63。
- 7) 第1～6図の断面図中の斜線は石理走向を示す。
- 8) 第2～7次の「共伴時期」欄の記載は、「唐古・健遺跡I」と同様、遺様・層位の所属土器様式を参考として示したもので、ここで呈示した土器様式がそのまま遺物の所属時期を示すものではない。
- 9) 松藤和人1979「再び“瀬戸内技法”について-瀬戸内技法第1工程を中心に-」「上山・桜ヶ丘遺跡-第1地点の発掘調査報告-」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第38冊 奈良県立橿原考古学研究所 pp.118-152。
- 10) 内山ひろせ・光石鳴巳2006「II. 馬見二ノ谷石器群における剥片剥離技術」「馬見二ノ谷遺跡-馬見丘陵における旧石器時代遺跡の調査-」奈良県立橿原考古学研究所調査報告第95冊 pp.160-165。
- 11) 塙田良道1980「石器群の原位置性・一括性に関するノート」「旧石器考古学』30 III石器文化談話会 pp.69-84。
- 12) このように、本資料は無加「のサスカイト原石ではなく、厳密に岩種分類をすれば「石核」の範疇に含まれる。しかしながら、本稿では、遺跡内への搬入形態を示す重要な証左として本資料に注目することから、「サスカイト原石」として提示している。第6図の18～19についても、同様である。



1~14:石核、15:剥片、16~19:サヌカイト原石



第61次調査:1、第69次調査:16~18、第79次調査:3、第84次調査:2、第93次調査:6・8・15・19
第98次調査:4・5・7・9~14

唐古・鍵遺跡北部地域出土の動物遺存体

京都大学大学院理学研究科 自然人類学研究室

東島 沙弥佳

1. はじめに

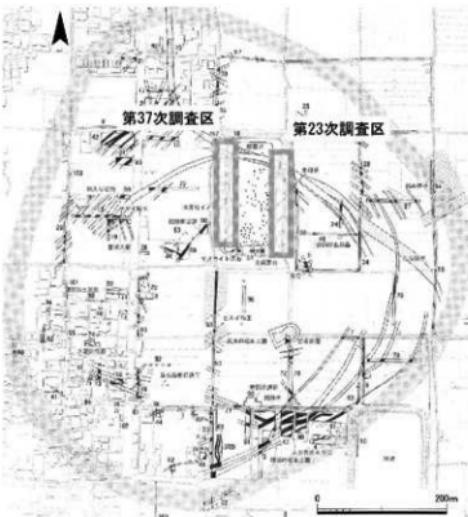
唐古・鍵遺跡第23次及び第37次発掘調査時に出土した動物遺存体、主に大型哺乳類遺存体の分析結果について報告する。福井県鳥浜貝塚に代表されるように、弥生時代に先行する縄文時代の遺跡出土動物遺存体は定量的な分析がなされ、当時の動物利用を復元する試みが多くなされている²⁾³⁾⁵⁾。しかし弥生時代の遺跡から出土した動物遺存体に関しては、報告書で簡単に取り上げられる、あるいは祭祀⁴⁾、家畜化¹⁾⁶⁾といった特定の議論で言及される場合が大半であり、定量的に分析がおこなわれた例はほとんどみられない。

唐古・鍵遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけて営まれた西日本でも最大規模の環濠集落であり、当時の奈良盆地における拠点集落であったと考えられている。弥生時代前期から中期中葉までは3つの微高地に別々に営まれていた3集落（北地区・西地区・南地区）が、中期中葉から中期後半には広大な1集落に統合されたことが環濠跡等から推測されている⁴⁾。

また、遺跡南部（南地区）からは青銅器鋳造の痕跡、遺跡西南部からは大型建物や他地域との交流をうかがわせる各種搬入土器等が出土し、統合後は集落内で機能による場所の使い分けがなされていた可能性が示唆されている。

しかし、第23・37次発掘調査区が立地する遺跡北部（北地区西部・西地区北部）からは遺跡南部・西南部のように土地の利用方法を示唆する目立った考古遺物はほとんど出土しておらず、遺跡北部の利用方法に関してはこれまであまり言及されてこなかった。

本稿では唐古・鍵遺跡北部地域から出土した動物遺存体の同定をおこない、定量的手法を用いて分析する。その結果より、唐古・鍵遺跡北部地域における動物利用についていくつかの可能性を提示する。



第1図 第23・37次発掘調査区の立地

2. 材料と方法

分析対象は唐古・鍵遺跡第23・37次調査時出土の動物遺存体である。両調査時出土資料とも、大半は発掘調査時に肉眼で確認し取り上げられた資料であり、多くは溝・土坑・自然流路等からまとまって出土しているが、一部にフローテーション（網目が5mm、3mm、1mmである3枚のザルを重ね、水洗）により採取された微細な動物遺存体も含む。

ただし、第23・37次調査時出

第1表 唐古・鍵遺跡 第23・37次調査時出土の動物種

魚綱	属・種不明	
カエル亜目	属・種不明	属・種不明
サンショウウオ亜目	属・種不明	属・種不明
両生綱		
ヘビ亜目	属・種不明	
爬虫綱		
鳥綱	属・種不明	
ネズミ亜目	属・種不明	
ムササビ	<i>Petaurus leucogonyx</i>	
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	
ニホンジカ	<i>Cervus Nippon</i>	
哺乳綱		

土資料とも、卜骨等祭祀との関係が濃厚な動物遺存体をはじめ唐古・鍵考古学ミュージアムに現在展示中の資料等は時間的制約から分析をおこなわなかった。また第37次調査時出土資料は、一部の小動物や魚類・鳥類遺存体、小型・中型哺乳類遺存体等が大阪市立大学で保管されており、こちらも同様の理由から同定をおこなわなかった。

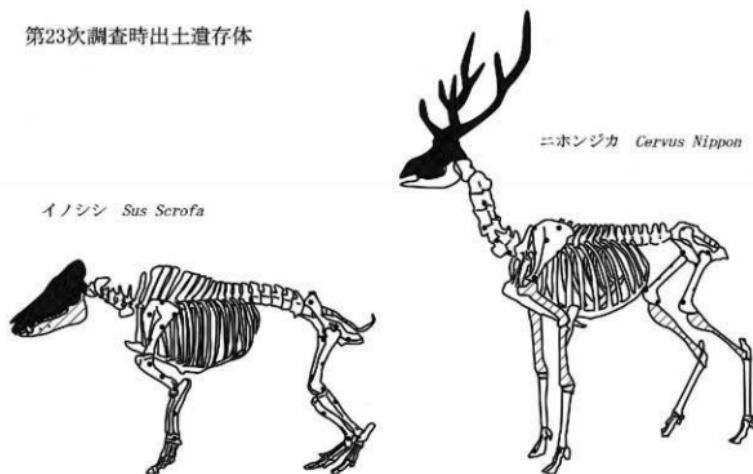
種、部位、左右等の同定作業をおこなった大型哺乳類遺存体については、明らかにイノシシとシカ以外として同定できるものは認められず、全ての大型哺乳類遺存体はこれらのいずれかによるものとした。したがって、頸椎以外の椎骨と肋骨についても、これらのいずれかと考えた。しかし、同定の困難さから、それらが二種のいずれに属するかの同定はおこなわなかった。

また、調査資料中には魚類遺存体やカエル遺存体も数多く含まれていた。脆弱で損失しやすい遺存体が良好な状態で多数出土していることから、埋没後の土壤環境は良好で当該遺跡北部地域出土の遺存体は十分に人間活動の痕跡を残しているものと考えた。そのため、埋没後、発掘までに受けた自然的効力による破損の程度（タフォノミー）はとりたてて考慮しなかった。

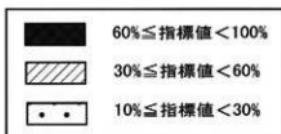
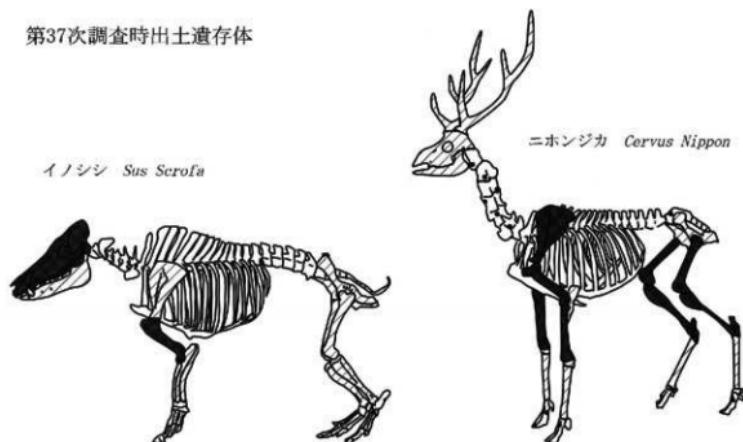
分析方法としては、まずNISPの算出、統いて最大要素数の算出をおこなった。

NISP (Number of Identified Specimens) は、総同定資料数から種の判別が不能であった資料数を減じたものとした。最大要素数は、NISPから重複カウントの危険性が高い（同一部位出来の可能性が高い）骨を排除した個を元に、全身骨格に元来含まれる各部位の数を考慮（全身骨格に1つしかない骨と2つある骨とでは出土頻度が異なるはずと考える）した上で算出した各部位の出上量である。この値が最大の部位を100とした時の、他の部位の相対値を算出し、同一種の部位間比較に用いた。ただし、歯は骨に比して残りやすく元来の数も多い部位であり、また当該遺跡では歯片が一部のフローテーション後の資料にも含まれることから、結果的にその他の部位とは取り上げ方法が異なることとなり、必ずしも資料数も多くなっている。そのため、歯の資料点数をその他の部位と同様に扱うとバイアスが生じると判断し、最大要素数の算出にあたっては、あえて歯を除いた。

第23次調査時出土遺存体



第37次調査時出土遺存体



第2図 第23・37次調査時出土のイノシシ及びニホンジカ遺存体の部位別多寡（%最大要素数）の比較

3. 結果と考察

(1) 第23次発掘調査時出土資料

同定した動物遺存体総数は872点であり、そのうちフローテーションにより採取された資料は91点である(第2表)。調査した遺存体全体のNISPは503点であり、フローテーション採取資料を除く肉眼観察による取り上げ資料のNISPは468点である。内眼で確認後取り上げた資料の中では、イノシシが277点、ニホンジカが62点、いずれかが107点みられた。

次に、イノシシとニホンジカ遺存体の部位別出土割合を示す最大要素数の算出結果について述べる。結果は第4・5表、第2図に示した。イノシシは頭蓋骨の出土量が最も多く、ついで下頸骨の出土が目立つ。その他の部位は、前肢、後肢の順に多く出土しているものの指標値は30%に満たず、頭部との差が大きい。手根・足根骨や踵骨・距骨・指節骨等の四肢末端部は最も出土量が少ないが、中手・中足骨に限っては例外的に前肢・後肢の出土量を上回る。また、環椎・軸椎をはじめ頸椎の出土も少ないので特徴的である。前肢では、肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨の出土量が類似し、後肢でも同様に、寛骨・大腿骨・脛骨が互いに類似した出土量を示す。ニホンジカでも頭蓋骨の出土量が最多であり、鹿角がそれに続く。

しかし、イノシシとは異なり下頸骨の出土は少ない。次いで上腕骨・橈骨といった前肢骨、そして脛骨・手根・足根骨が多い。また、中手・中足骨の出土は全くみられない。

(2) 第37次発掘調査時出土資料

著者が調査した動物遺存体は3409点であり、そのうち、フローテーションにより採取された資料が1789点を占める(第3表)。調査した遺存体全体のNISPは2272点であり、フローテーション採取資料を除くと1106点となる。内眼で確認後取り上げた資料の中では、イノシシが466点、ニホンジカが199点、いずれかが249点みられた。

次に、イノシシとニホンジカ遺存体の部位別出土割合を示す最大要素数の算出結果について述べる。結果は第4・5表、第2図に示した。イノシシ遺存体において出土量が最多であったのは、頭蓋骨であった。下

第2表 分析した第23次調査時出土の動物遺存体数

	フローテーション	内眼採集	分析総数
イノシシ	14	277	291
ニホンジカ	6	62	68
イノシシorシカ	11	107	118
ニホンジカorカモシカ	1	5	6
サカナ	1	8	9
カエル	2	3	5
ネズミ	0	5	5
トリ	0	1	1
不明	56	313	369
計	91	781	872

第3表 分析した第37次調査時出土の動物遺存体数

	フローテーション	内眼採集	分析総数
イノシシ	189	466	655
ニホンジカ	26	199	225
イノシシorシカ	46	249	295
ニホンジカorカモシカ	5	4	9
サカナ	316	52	368
カエル	340	109	449
ネズミ	199	16	215
トリ	21	0	21
アオダイショウ	5	0	5
スッポン	3	2	5
ムササビ	0	1	1
モグラ	8	0	8
サンショウウオ	8	8	16
不明	623	514	1137
計	1789	1620	3409

第4表 第23・37次調査時出土イノシシ遺存体の出土部位別割合

	第23次 最大要素数	%最大要素数	第37次 最大要素数	%最大要素数
頭蓋骨	49.00	100.00*	74.00	100.00*
下頸骨	24.00	48.98	39.00	52.70
顎骨	0.00	0.00	18.00	24.32
軀椎	0.00	0.00	4.00	5.41
椎骨	2.00	4.08	5.60	7.57
肩甲骨	11.00	22.45	40.00	54.05
上腕骨	13.00	26.53	48.00	64.86
橈骨	11.00	22.45	30.00	40.54
尺骨	8.00	16.33	29.00	39.19
仙骨	0.00	0.00	2.00	2.70
寛骨	7.00	14.29	25.00	33.78
大腿骨	8.00	16.33	23.00	31.08
膝蓋骨	2.00	4.08	2.00	2.70
脛骨	6.00	12.24	38.00	51.35
腓骨	0.00	0.00	1.00	1.35
手根・中足骨	17.00	34.69	30.00	40.54
手根・足根骨	7.00	14.29	5.00	6.76
踵骨	5.00	10.20	8.00	10.81
跗骨	7.00	14.29	14.00	18.92
指骨	4.25	8.67	6.50	8.78

* 最大要素数が最も高い部位を100とし、その部位に対する他の部位の出土量を算出

第5表 第23・37次調査時出土ニホンジカ遺存体の出土部位別割合

	第23次 最大要素数	%最大要素数	第37次 最大要素数	%最大要素数
鹿角	8.00	61.54	11.00	52.38
頭蓋骨	13.00	100.00*	10.00	47.62
下頸骨	1.00	7.69	8.00	38.10
顎骨	2.00	15.38	6.00	28.57
軀椎	0.00	0.00	4.00	19.05
椎骨	2.00	15.38	4.80	22.86
肩甲骨	2.00	15.38	13.00	61.90
上腕骨	6.00	46.15	13.00	61.90
橈骨	4.00	30.77	14.00	66.67
尺骨	1.00	7.69	10.00	47.62
仙骨	0.00	0.00	4.00	19.05
寛骨	3.00	23.08	11.00	52.38
大腿骨	3.00	23.08	21.00	100.00*
膝蓋骨	0.00	0.00	0.00	0.00
脛骨	6.00	46.15	17.00	80.95
手根・中足骨	0.00	0.00	8.00	38.10
手根・足根骨	4.00	30.77	12.00	57.14
踵骨	2.00	15.38	13.00	61.90
跗骨	1.00	7.69	10.00	47.62
指骨	2.00	15.38	3.25	15.48

* 最大要素数が最も高い部位を100とし、その部位に対する他の部位の出土量を算出

頸骨も比較的高い出土量を示す。これらの点は、第23次調査時出土資料の傾向と一致する。しかし、当該調査時出土資料では後肢に比して前肢の出土量が概ね高い。これは、第23次調査時出土資料では前肢と後肢の出土量に大差がなかった点と異なる。また、頭蓋骨と四肢の出土量との差異が小さい点も、第23次調査時出土資料と異なる。一方、ニホンジカでは大腿骨の出土量が最も多く、脛骨がそれに続く。次いで橈骨、肩甲骨、上腕骨の出土量も目立つ。前肢と後肢を比べると、後肢の出土割合が高い。

4.まとめ

今回、調査した動物遺存体総数は4281点であり、NISPは2775点であった。各調査時出土のイノシシとニホンジカの部位別出土割合を比較すると、両種とも第23次調査時出土遺存体における四肢の割合が第37次に比べて少ない。さらに、第23次調査時出土のニホンジカ遺存体では、鹿角・頭蓋骨が高い出土割合を示す一方で下顎骨の出土がほとんどみられない点、鹿角同様骨角器の原料として用いられる中手・中足骨が一切みられない点等、出土割合に偏りがみられる。この事から、第23次調査区と第37次調査区では、ほぼ同じ時期に動物利用をおこなってはいたが、その内容に差異があった可能性がうかがわれる。

謝辞

本稿は、2009年に奈良女子大学に提出した卒業論文の一部を改変し、研究報告としたものである。本稿の作成にあたり、以下の方々には多大なるご助言と励ましを頂きました。末文ながら、深謝致します。

中務真人先生（京都大学大学院理学研究科）、藤田三郎様、河森一浩様（田原本町教育委員会・唐古・鍵考古学ミュージアム）、佐野晋一様、宮田和周様（福井県立恐竜博物館）、米川裕治様（奈良県立橿原考古学研究所）、宮路淳子先生（奈良女子大学文学部）、佐藤宏明先生、保智己先生（奈良女子大学理学部）；（所属機関50音順）。とりわけ、藤田三郎様、河森一浩様には長期間にわたる資料調査を許可して頂き、また未発表の情報も提供して頂く等多くなご協力を頂きました。また、指導教官であった宮路淳子先生には1年間のご指導を賜りました。御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 安部みき子1996「イノシシとブタを考える」「卑弥呼の動物ランド」大阪府弥生文化博物館
- 2) 内山純蔵2000「鳥浜貝塚におけるシカ・イノシシ問題－1984年出土ニホンジカとイノシシ遺存体にみる遺跡機能－」『鳥浜貝塚研究』2 島浜貝塚研究会
- 3) 内山純蔵2007『縄文の動物考古学－西日本の低湿地遺跡からみえてきた生活像』昭和堂
- 4) 唐古・鍵考古学ミュージアム2007『弥生の王都 唐古・鍵 ヤマト王権はいかにして始まったか』
- 5) 茂原信生・本郷一美・網谷克彦1991「鳥浜貝塚出土（1985年調査）の哺乳類遺存体（動物考古学の基礎的研究）」『国立歴史民俗博物館研究報告』29
- 6) 田原本町教育委員会1988『唐古・鍵遺跡 第21・23次発掘調査概報』
- 7) 田原本町教育委員会1996『弥生の風景 唐古・鍵遺跡の発掘調査60年』
- 8) 田原本町教育委員会編2001『唐古・鍵遺跡の考古学』学生社
- 9) 田原本町教育委員会2006『唐古・鍵考古学ミュージアム展示図録』
- 10) 西本豊弘1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』36
- 11) 春成秀樹1993「豚の下顎骨懸架－弥生時代における辟邪の習俗」『国立歴史民俗博物館研究報告』50

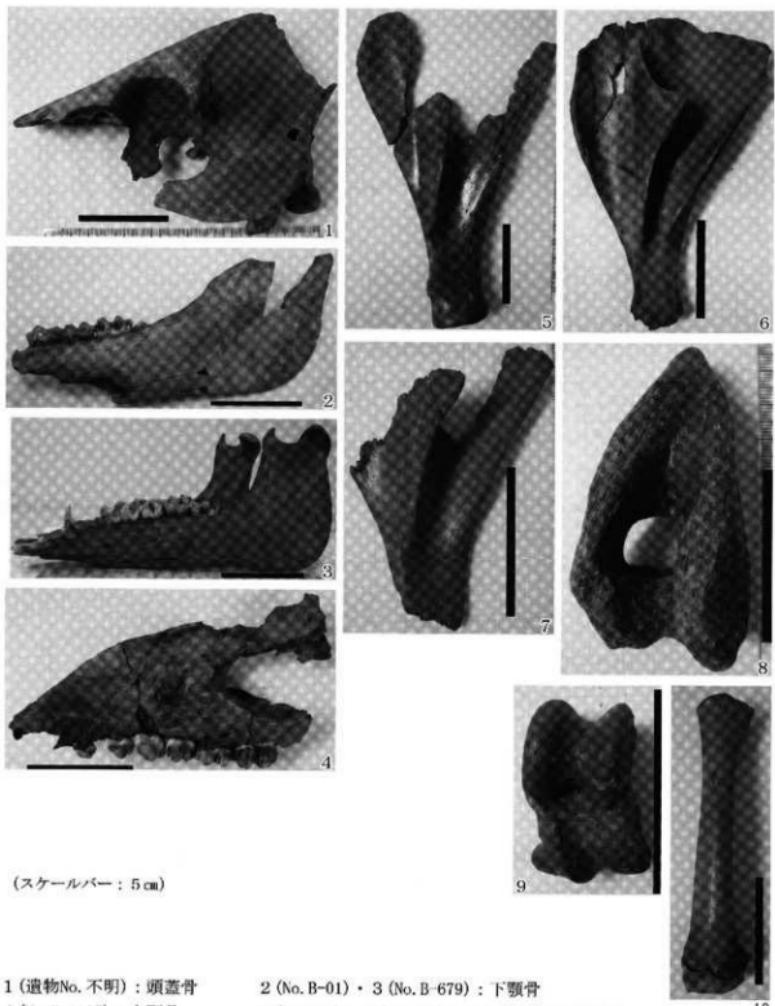


写真1 第23次調査時出土のイノシシ遺存体

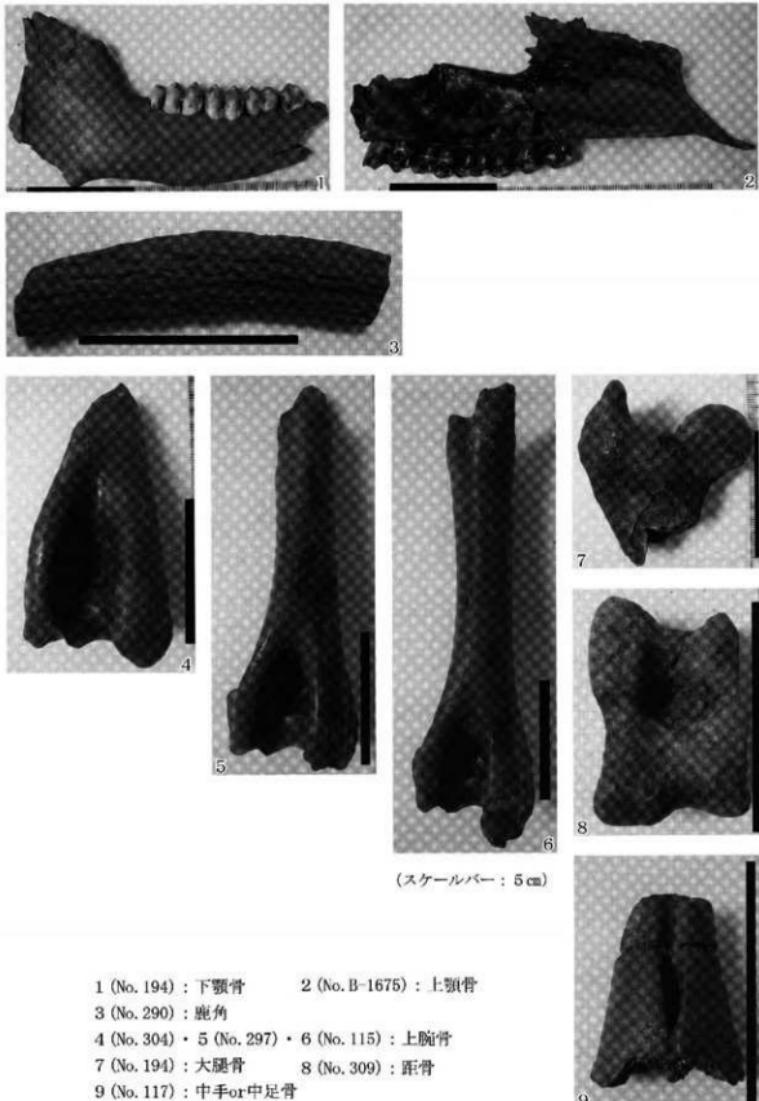
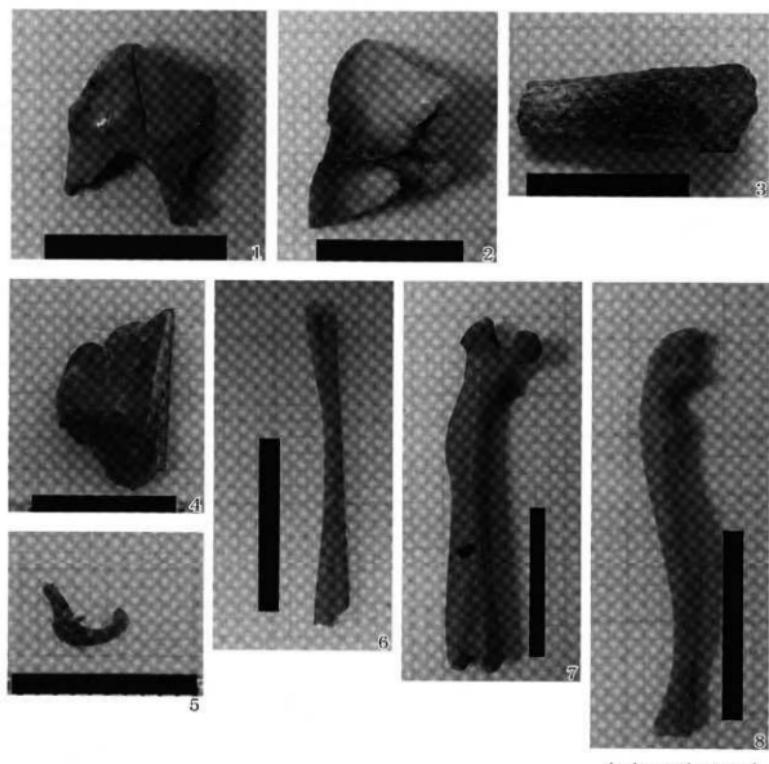


写真2 第23次調査時出土のニホンジカ遺存体



(スケールバー：1 cm)

- 1 (No. 417) • 2 (No. 417) • 4 (No. 449) : イノシシ臼歯
 3 (No. J) : ニホンジカ臼歯
 5 (No. J) : サカナ咽頭骨
 6 (No. 424) : カエル脛腓骨
 7 (No. 417) : ネズミ大腿骨
 8 (No. 417) : ネズミ尺骨

写真3 第23次調査時出土の微細な遺存体（主にフローテーションにより採取された遺存体）

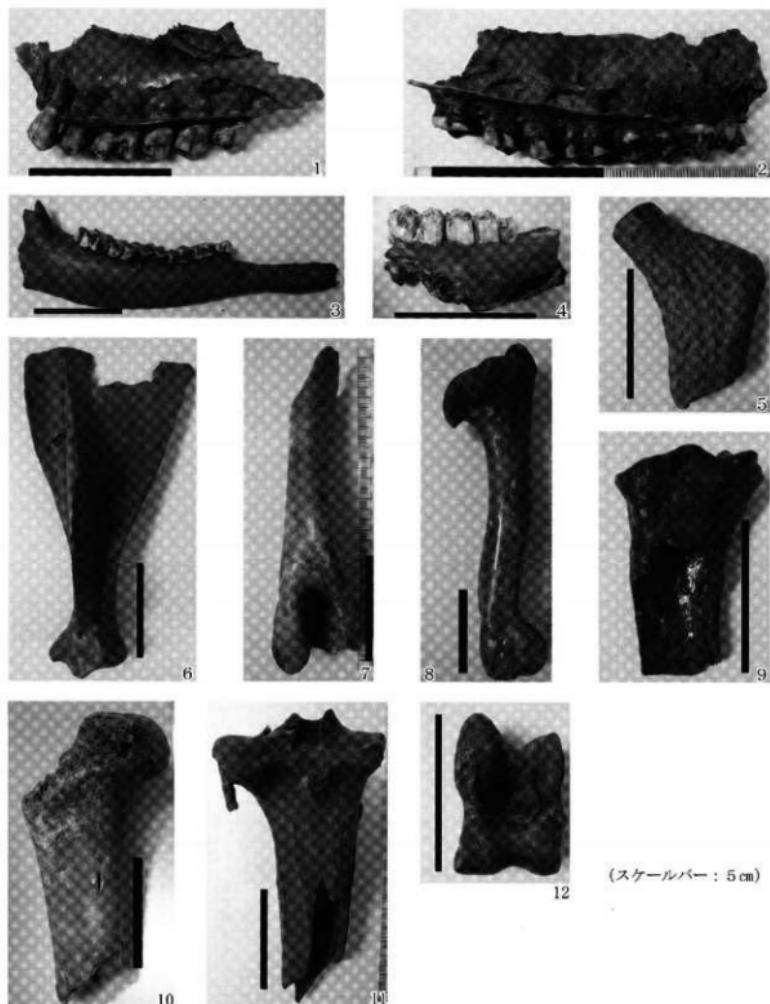


(スケールバー: 5 cm)

- 1 (No. 469) • 3 (B-510, No. 1103) • 4 (B-511, No. 1103) : 頭蓋骨
- 2 (B-507, No. 1103) : 上顎骨
- 5 (No. 997) • 6 (B-505, No. 1103) : 下顎骨
- 7 (No. 803) : 環椎
- 8 (No. 823) • 9 (No. 824) : 肩甲骨
- 10 (No. 412) • 11 (No. 150) : 距骨



写真4 第37次調査時出土のイノシシ遺存体



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 (No. 802) • 2 (No. 368) : 上顎骨 | 3 (No. 358) • 4 (No. 359) : 下顎骨 |
| 5 (B-502, No. 365) : 鹿角 | 6 (No. 916) : 肩甲骨 |
| 7 (No. 948) • 8 (No. 126) : 上腕骨 | 9 (B-701, No. 806) : 桡骨 |
| 10 (No. 979) : 大腿骨 | 11 (No. 358) : 脛骨 |
| | 12 (No. 730) : 距骨 |

写真5 第37次調査時出土のニホンジカ遺存体



- 1 (No. 582) • 2 (No. 1059) : カエル腸骨
 3 (No. 499) : サカナ椎骨
 4 (No. 1059) : ムササビ下顎骨
 5 (No. 239) : モグラ下顎骨
 6 (No. 195) : ネズミ尾椎
 7 (No. 1092) : キジ手根中手骨
 8 (No. 425) : ネズミ寛骨
 9 (No. 425) : ネズミ仙骨
 10 (No. 1092) : カエル脛腓骨
 11 (No. 818) : イノシシ臼歯

(スケールバー: 1 cm)

写真6 第37次調査時出土の微細な遺存体（主にフローテーションにより採取された遺存体）

田原本町文化財調査年報18

2008年度

平成22年2月1日

編集発行 田原本町教育委員会

印 刷 株式会社 明新社

